538
242

A 298

538-242

山内亮著

決鬪

四紅社版

大正
14.6.27
内交

裝

幀

林

崎

祝

泥棒龜とその仲間……（三）
小さな町の出來事……（四九）
スパイ……（八五）
K村行……（一二九）
決闘……（一五五）
憶病者……（一八三）
忘られぬ挿話……（二〇三）
眼……（二二一）

泥棒龜とその仲間

一

埃つぽいこの小さな町の街路にも、新緑のころの慌しさと、みづみづしさが到處に溢れてゐる。樹の梢からも土のなかからも、燃え狂ふやうな緑が、大地の核心から噴き出す生命力のやうに、晴れた五月の空に向つて躍動してゐる。「山ノ手」町の家家の周圍は、冬の間ぢう墓場のやうな沈欝に支配されてゐた束縛から急に解き放されて、緑の焰に包まれて生生と蘇生つて見えた。何處の小路を通り過ぎても、とりわけて別に騒いでゐるといふでもないのに、眼にも耳にもはつきりと認められない騒擾が、人々の心の上には感ぜられた。

春、春、春――この大きな喜びが、紺碧に晴れ渉つた大空に、飛び狂ふてゐるかと感ぜられ、そこにはこの喜びを汚すやうな、小さな汚點さへも――まして貧乏や爭鬪や盜みなどの人の

氣持を暗くするやうなものは、何ひとつあり得べからざるもののやうに思はれた。春が來たー

この語の持つ魅力が、そして、それを具象化したやうな地上の綠が、總べての人類の不幸を、一晩のうちに拭ひ去つてでもくれるやうな奇蹟のやうな春——その春の喜びのなかに漂はされてゐる山ノ手町のある通りを、まるで街路の片隅へ蹴飛ばされた石塊のやうに、慘めな姿で一人の青年が歩いて行く。

青年は刺戟の強い五月の空氣を胸一杯に吸ひこんだ。空腹に疲れきつた青年の肺には、冷々とする新綠の空氣は、少しばかりの重い抵抗と痛みとを與へた。彼は眉の間に皺をよせて、粘つた唾液を地上に吐いた。そして肘の破けた洋服の袖で胸を押へるやうに、身體を縮めながら歩いた。肩のあたりには藻屑のやうなものがくつッき、地色も判然せぬやうになつたズボンと靴との間からは、歩るく度びに裸の足がちら〳〵と見えた。面長な眉の濃い苦味走つた蒼ざめた顏が、深々と冠つた古帽子の下から覗いてゐた。そして彼はまるで醉ッぱらつたやうな足調子で歩いてゐた。

彼の眼の前をかすめるやうにして、白い腹を見せて燕が飛んだ。彼は足を止めて、それの後影をじつと瞶めた。こまた、何處から來たのか同じやうな燕が、急流を流れて行く木の葉の一片のやうに、すうつと波形を描いて彼の顏の間近かを掠めて行つた。この小さな鳥の動搖にも彼の身體は微かな痙攣を感じた。空腹と疲勞とが、再び彼の心身を烈しく嚙みはじめた。何でもいい、草の芽でも木の葉でもむしりとつて口へ入れたい程の、物狂はしさが胸を押へ始めた。彼の心は考えまい考えまいと焦燥ながら、何時の間にか熱い湯氣の立つ香しい味噌汁や、白い艶々した飯や、魚や獸肉や野菜の山盛りになつた皿の幻影のなかに引き入れられてゐた。彼はまるで夢心で、其等の食物を口中に入れてでもゐるかのやうに、齒を嚙み合はせ、咽喉佛を微かに顫はせてゐた。幻影が破れて、はつと氣の附いた瞬間には、頭の眞中を針金でも貫つてゐるやうな眩暈に襲はれた。そしてまるで時計の彈機(ぜんまい)がはち斷れた時のやうに、ふらふらッとなりさうな氣持を、懸命の努力で引締め引締めしてゐた。

彼は「山ノ手町」の坂を下りて、港の道を歩いて行つた。やがてこの町の市役所の前まで來

ると、彼は急に足を止めてその建物を眺め廻してゐたが、直ぐそこの塀の根のところに坐つて終つた。朝の人の出盛りが、ひとまづ濟んで終つた後で、町通りはひつそりとしてゐた。直ぐ横町の市場も朝食と晝食との間の時間なので、騒ぎも靜かであつた。彼は街路一面に照らしてゐる、麗かな日光を無心で眺めてゐた、じつと瞶めてゐると、眼前の地の中へ自分の身體が吸ひこまれて行くやうな、どんなに跪いても抵抗できない、不思議な感覺が彼を押へ始めた。

しかし、さうして眼を地上に伏せて、その苦しい思ひに身體を任せてゐることは、一刻も堪えられない恐ろしさであつた。そこで彼は顔をあげて、晴れた空を眺めた。しかし其處にも彼を飢餓から救ふてくれさうな、何の希望の閃めきも見えなかつた。また眼前の家の店頭や人々の顔を眺めた。しかし其處には賣れるあてもなささうな澤山の着物や食料品が、空しく積まれて居りながら、いまこの瞬間にその必要に迫られてゐる彼に對して、それを惠んでくれさうな顔はひとつも見えなかつた。

彼は日の溫もりで、ぞろ〳〵這ひ出した襟頸の虱を、そつと指先でつまみ出して石の上で潰

した。後から後からと潰しながら、その潰された虱の殘骸を心持よく眺めてゐた。人間の血を身體一杯に吸つて肥つた、鈍い灰色した無感覺にのろくさ這ひ廻る虱は、彼の眼にはちやうど、勞働者の膏血を絞りとつて肥え太つてゐる資本家のやうに思はれた。全身何處を切つて見ても、血を吸ひとるための機械としか思はれない、その蟲の貪慾さまでが、絞つても絞つても、これで絞り足りたといふ程度を知らない資本家に似てゐた。彼は虱を石の上に乘せて、其奴が飽滿した血と日のぬくもりに快い氣持でゐるところを、親指の爪でぐつと壓した。ぱちツと微かな音を立てて爪の下で潰されて終ふ。そして飽くまで貪り吸つた人間の鬱んだ血が、石の上に氣持よく煮染み出す、彼は慘忍な快感に浸りながら、丹念に虱潰しをやり始めた。しかしそれも到底ながく續かなかつた。またもや飢餓の感じが、彼の全身の血液を混亂させ始めた。虱潰しの快感から現實の生活問題に立戻つた彼の頭には、兇暴な血が廻ぐり出した。

彼の眼前には再び澤山の食料品や、食料品を惜氣もなく、むざむざと喰ひ棄てる滿腹した人間達の顔が浮んで出た。彼は病的な執拗さで、その顔の持主を憎くんだ。いまのさき、指の先

で虱を潰したやうに、これらの顏の持主を、何か大きな締木のやうな機械に掛けてやつたら……と考えた。

春の空氣が何だ、日の光りが何だ、ここに飢ゑて氣が狂ひかけてゐる人間がゐるのに、汝達は春だ太陽だと云つてゐるのだ。俺は飯が欲しいんだ。それから後でなら春もいい、太陽もいい。また思想でもいい。俺らは萬人共同の世界を現出さす前に、まづ奴等に今の俺らと同じにこの苦しみを味はせてやらなくちゃ承知ができない——かう彼は町の人々に怒鳴りつけてやりたかつた。

彼はこの思想に驅り立てられるやうな思ひで、ふらふらッと地面から起ち上つた。そして無意識のうちに、また港の方に歩るき出した。兩手をぐつとズボンのかくしに突込んで、背を圓くして猫背になつて歩いて行く姿を、五月の爽やかな微風が、後方から追ひ立てるやうに吹きつけた。

二

間もなく青年の姿は、港の棧橋の附近に見られた。午前の十時ごろ。荷揚げは今が眞最中で、汽船から荷揚げしてゐる勞働者の群は、まるで蟻が餌食を自分の巣へ引張つて行くのと同じに、汽船から倉庫へぞろ〳〵と續いてゐた。

青布を引き伸したやうに穩かな海が、日の光りの下で、さも嬉しさうに微笑してゐた。大小十艘に近い汽船の甲板では、どれもこれも船員が甲版の掃除、帆布の修繕、檣綱の繫ぎ合せなどに忙しさうに見えた。檣樓の上でも、金具の緩みを締める鐵槌の響が、高く低く海面に反響してゐた。傳馬船が船から船へ通ひ、短艇が海面を引裂いて船と棧橋との間を往復してゐた。今朝入港たばかりの大型汽船は、その黑と白と染分けの舷を朝日に美しく輝かせながら、その二本の煙筒からはまだ煙を吐き出してゐた。起重機の廻轉の音が、この海上と陸上の活動の總べてを支配するもののやうに、時々轟然と響き渉つた。

幾百人といふ人間の勞働も、これらの機械の前にあつては、小つぽけな動物の蠢動にしか過ぎない。青年は棧橋の上に行んで、この海と陸との活動を眺めてゐた。

『オイ龜キぼやぼや（茫んやり）するなよッ』かう突飛ばされるやうに怒鳴られて、彼が顏をあげると、其處には仲間の一人が、兩手に何か重さうな包みを下げながら立つてゐる。

『貴樣か。』と彼が云ふや云はぬに

『何だ貴樣かもあるかい、馬鹿野郎。眞晝間この盛り場で狐にでもツマまれたやうな、薄のろな風體でゐやがつて。ハハハ……』と仲間は笑つた。

青年龜キ（彼の名は龜田喜太郎）は苦笑しながら、立上つて仲間の方を向いた。

『お前まだ船にをるのか』と訊ねた。

『さうだよ。この商賣を長くやるとなあ……』と意味の判然としない辭で答へた。

『何時入港つたい。』

『今朝がたよ。どうだ、これを見ねえかよ』。と仲間は兩手の包物を、彼の鼻先きへ突つけた。

『どうするんだ。』

『どうするつて？　これ――』と仲間は自分の鼻を突き出しながら『これの代物（しろもの）さ。』

『バクチか。』

『バクチ、バクチつて云ふなよ。海の上ぢや天下晴れての御商賣（ごしやうばい）だぜ。』

かう云つて彼の仲間は、ぶら〳〵歩るき出した。

『とにかく』と一つ唾液をぐつと呑みこんだ仲間は『とにかくッて云ふ奴さ。なあ久し振りだ。其處らで一杯つき合へ。』

『よからう』と彼は急に元氣な聲を出した。『俺あ三日も前から何も喰つてゐないんだ。』

『何だつて』。と仲間は不思議さうな聲を出した。

『首になつたんだ。一ト月も前に』。と彼は說明した。

『首にされたのだ……馬――鹿――野――郎』。と彼の仲間は奇妙な聲を出して、呻吟くやうに云つた。

二人は肩を並べて歩るき出した。彼は堪えられない空腹で、膝頭がともすそとがつくりと崩れさうなのを、無理に延ばすやうに力を入れて歩いた。潮氣を含んだ軟かな風が　砂地の上を吹いてゐた。二人は錨や錨綱の散亂してゐる間を、彼方に跳び此方に廻りしながら、町の本通りを避けて海岸傳ひに裏町へ入つた。海藻の香と魚類の匂とが街中に強く漂つてゐるなかを、怪し氣な小路を通り抜けて、やがて一軒の鐵工場の前へ來て立止まつた。龜キの仲間はこの鐵工場の前で、『此處だ』と小さな聲で彼に相圖して、そのまま鐵工場の入口を入つた。

龜キは仲間の姿が、そこに消えるのをじつと見守りながら、茫然と待つてゐた。鐵工場といふ程、大きな工場でもない家の入口には、四枚の磨硝子戸が閉つてゐて、入口の柱には村田鐵工場と麗々しく看板だけは懸つてゐた。內部からはダイナモの廻轉の音や調帶の滑る音や、鐵板をきるらしい鈍重な響などが聞えた。油で顏や手足を眞黑にした職工の姿が、それらの機械の間に動いてゐた。嗅ぎ慣れない鐵の匂が微かに彼の鼻を刺戟した。その匂を嗅ぐと、彼は自分が木材工場にゐた時に長い間嗅ぎ慣れて來た、酒の匂に似た芳醇な木の香りを懷しく思ひ出

した。それと同時に廻轉鋸の下で、びびびび……とまるで紙でも引裂くやうな音を立てて、引裂かれて行く材木の濕りを帶びた木屑を浴びながら、朝から晩まで働いてゐた頃のことをも思ひ出した。

龜キの胸のなかでは、憎惡と復讐との血が一時に騷ぎ出した。自分が始めて三年前に、この町から十里も奧の山中から、家業の炭燒きを棄てて出て來た時のこと、その時に自分の家へ訪ねて來た木材會社の事務員の顏、鼻の横に大きな黑子があつて、それに生毛が生えてゐたことなどまで、まるで昨日あたりの出來事ででもあるやうに、はつきりと思ひ出した。それからはまるで會社の機械のやうになつて――否、鋸の把手にでも附着した金挺のやうになつて、毎日朝から晩まで鋸の刄の下へ材木を押出したり引込めたりして……さうだ、自分は一體何年の間そんなに働いて來たらう。山に住んでゐた時に、圓々と赤く肥え太つてゐた兩頰は、今では水でも溜りさうに窪み、山道十里や十五里を何の苦もなく歩いた兩脚や、廿何貫の荷物を輕々と擔いだ肩は、今では老人のやうに萎びかけてゐる、自分達が年々かうして痩せて行く間に、會

社の持主の下腹は勢よく張り出して來た。株主達の配當は年增しに增加して行つた。ところで不圖した出來心から、ある社會主義者の宅へ何氣なく出入したと云ふことが、會社に知れて不意にこの頸をバツサリとやられて終つた。そして俺は今日で三日間飯ごころか、何も喰はないんだ。それだのに俺の膏汗ミ生血とを絞り拔いた人間は、腹一杯喰つた上に、まだ何だかだと詰め込まうとしてゐる。こん畜生めッ。俺はもう氣が違ひさうだ。何でもいい、この足下の石塊でもいいから、口の中へ入れて嚙んでゐたら、少しは飢ゑをごまかしてゐられるだらうか。否、否、この鐵工場のダイナモに、俺の頭をたたきつけてやらうか——そして彼は思はずよろけて、硝子戸に突當らうとした。

その時、彼の仲間が內部から跳び出るやうにして出て來た。その顏は湧き返へるやうな喜びで頹れてゐた。振り上げてゐる兩手は先刻とは違つて空であつた。風呂數を頸に卷きつけて、鳩の啼くやうに咽喉の奧をぐうぐう鳴らしながら、蝦にでもなつたかのやうに身體をくねらせて跳ね廻つた。龜キはそれを見るミ肝癪が胸許へこみあげて來た。いきなり擲ぐりつけるか、

蹴飛すかばしたいやうな氣がした。

『さあ飲めるぞ、飲めるぞ。飲みたいだけ飲んで食ひたいだけ食へ、どんなことしたつて、今日の勘定は俺樣が持ちだぞッ。』と仲間は彼に抱きつかんばかりにして、怒鳴り散らした。

『馬鹿つ。氣違ひになつたんか、貴樣あ』と龜キも怒鳴りかへした。

この聲に仲間の船員は吃驚して、急に押默つた。そして潮風に燒けて赭黑くなつた、鬚のないすべすべした顏を、きよとんと据ゑて眼をぱちくりさせた。だぶだぶの水兵服が急に滑稽に見える程彼は悄氣だした。

『兎も角も、何處かでヤリながら話さうぢやないか』と溫和しく言つた。

『うん、お前の行きつけの店がいい』と龜キも聲一杯怒鳴り散らしたので、今朝からの鬱憤も一時に何處かへ消えて終つて微笑しながらそれに答へた。

二人は肩を並べて歩き出した。晴々ミした五月の太陽が、紺碧の空にさんらんとして照り輝いてゐた。微風に追はれるやうに、燕が二人の前を掠めては飛んだ。

『太十。』と龜キはその仲間を呼んだ。『お前、海は面白(おもしれ)えか。俺も飯食ふ道を何とかしなけりやア。』

『どうだ、俺が世話してやらうか、丁度、一人欲しがつてるところがあるんだがな。』

『お前ンところの話か。』かう云つて龜キは、輕るく咳をした。

太十は樂しさうに口笛を吹いた。そしてチラツと龜キを横目で眺めながら、この失業の半病人を憐れむやうに

『まあゆつくり話さうぢやねえか。お前この頃身體を惡るくしたんだなア。』と云つた。

再び二人の前には、海が見え出した。都會のどよめきとは遠つた、沈んだ底力を持つた動搖が、龜キの胸に感ぜられた。河口に沿つた片側町は、軒並飲食店が續いてゐた。魚の煮える匂や、油の焦ける匂、酒の香などが、海から打上げて來る藻屑の匂と入交つて、彼の空腹を強く刺戟した。酒に醉つた男ごもの大聲に喚き散らす唄聲が、彼方此方の店から聞えて來た。

生きたガイコツが踊るよ踊る

ガイコツどんなこと言ふて踊る、よ
やせたやせたよ外米食ふて痩せた
日本米戀しいと言ふておどる
ほんにエライもんぢや生きてる生きてる
生きてる證據にや動いてる、よ
青い顏して眼をくぼませて
ヒクリヒクリと生きてゐる……

この唄が終らぬ裡に、大聲でごつと笑ふ聲が聞えた。その笑聲が靜まるのを待つてゐたやうに、別な聲がまた唄ひ出した。

機械でドヤして血肉を絞り
五厘の「かうやく」はる濕情主義
そのまた「かうやく」を漢字で書いて

「澁澤論語」と讀ますけな、あゝノンキだね……

「ノンキだね」と唄つてゐるその聲は、泣くとも笑ふともつかぬ、哀切な響を帶びてゐた。もう廿年もの昔に廢たれて終つた、手風琴の音がその唄に合せて鳴つてゐた。その音はまるで喘息病みの胸のやうに、苦しさうに掠れては、時々息切れのするやうに聞えなくなつた。

太十は『オイ』と云つて龜キの肩を突くと、いきなりその店へ入つて行つた。

三

店のなかは暗かつた。むつとする溫味と食物の香や、人間の汗の匂なぎが、汚れ腐つた空氣のやうに、二人の顏に襲ひかかつた。薄暗いなかで、澤山の人の頭が瓜畑に轉がつた瓜のやうに、彼方此方に動いてゐるのが見えた。二人は暫らくの間はじつと入口に彳んでゐた。

『ヨオ大將』と誰かが跳び出して來て、太十の腕を無暗に引張つた。それが誰なのか、はつきりしない程に、眩しい太陽の照る外から入つて來た此室は、窖が何かのやうに暗かつた。

『來いつたら、何をぐずぐずしてるんだよ、さ』とその男は片手に持つてゐたコップを、太十の鼻先へ突つけた。酒の香が鼻から腦へ突ぬけた。

『イヨオ、此方の先生』と足許のひよろつく醉漢が、威勢よく龜キに抱きついた。『さあ一杯だ。なあ、日本米戀しいと言ふて踊るだ、あコリヤコリヤだ。』

龜キと太十は漸く四邊の人顏が知れて來た。見知り越しの顏が、それでも三四人はあつた。食卓一杯に群がつた勞働者——河岸の荷揚人足や船員達——は新來のこの二人を拍手して迎へた。足下の土間には、空になつた酒瓶が幾つとなく轉がつてゐた。窓一つない室の內は、戸外から流れこんで來る僅かの外光で、食卓の上の品を照してゐた。酒瓶の列んでゐる棚の奧からは、魚を燒く濃い烟が、雲のやうに此方へ流れこんで來た。皆は顏を顰めながら、酒を呑んだり魚を嚙つたりしてゐた。じめじめした空氣が、足下から這ひ上つて、全身を撫で廻すやうに龜キには思はれた。彼は長い間の空腹に堪えた揚句、突然この强い刺戟に富んだ環境に連れて來られたので、まだ酒一滴も飲まぬ先から、もう醉つたやうに頭がふらふらして來た。彼は自

分の前に置かれた酒を息も吐かずに飲み、眼の前の鯡を手掴みにして食るやうに喰つた。酒の匂は頭の底に疼くやうに浸みこんだ。魚の肉は衰弱してゐた胃には、石塊でも陥ちこんだかと思はれる程に抵抗力を感じた。彼は食卓の上に身體を押し付けるやうにして、狂人になつたのかと思はれる程に食物を貪つた。太十やその仲間の話しかける聲も、食ふことに夢中になつてゐる彼の耳には入らなかつた。

食卓とは離れて別の腰掛けから、この騒ぎに耳をすませてゐた盲人が、この時不意に手風琴を鳴らし出した。

『さあ、先刻からの續きをやれッ。』と酒焼けのした大男が、鐵槌でもなぐりつけた時のやうな、響きのある聲で喚いた。

『文句入りのをやれ、盲目野郎』と誰かがそれに應じて怒鳴つた。

『涙の出るのをやれ』。

『馬鹿つ。俺ら醉つ拂つてるんだぞ。さあ、やれやれ、早く唄へ。こん畜生、ブチのめすぞ』

と一人の男が突然立上つて、ふらふらと歩るき出した。彼は右手を肩から失くしてゐた。袖が風呂敷でも引懸けたやうに、横腹のところで、ひらひらと翼のやうに動いてゐた。彼は左手を頬にあてて、まるで泣き出しさうに額に皺をよせ眉をつり上げて唄ひ出した。

貧民窟の徳川さんと
大阪の貧亡人
妙な話をしたさうな

「われ東京もんやさうやな、われとこ家賃なんぼや」
「家賃といつて別に拂つちやゐない」
「よう拂はんのやろ、一體何人暮しや」
「さやうさ、全部で三十人も居るかな」
「ドエライ家内やな、みんな内職でもしてんのか」
「いや、みんな遊んでゐる」

てなこと仰つしやいましたかね……

盲目の彈く手風琴は、この唄に合せて掠れた聲で咽び泣くやうに音を立てた。蒼白い空氣を顫はせて、その音は病人の斷末魔の呼吸を思はせるやうに呻吟いた。腕なしは足下もきまらぬ程に、よろよろと室の壁に凭りかかりながら唄ひ續ける。

酒の香りに吹く風もしめる
煙草のけむりに窓くもる
烟にくすむ、わたしのからだ
お酒びたりのこのこころ……

唄ふ聲は聽手の腹の底に喰ひ入るやうに、低くなり高くなり、怨むやうな、歎くやうな、または憤るやうな調子で人の心に絡みつく。皆はしんみりとなつて、腕なしの唄に聞き惚れてゐる。戸口にも四五人の人が足を止めて、酒場の内部を覗きこんでゐた、腕なしは腰に左手を當てて、前半身をのめらすやうにかがませながら、胸の底から絞り出すやうな聲音を顫はせて

一度沈んだこの底の闇
浮び出ることかなやせぬ
ええ、ままよ
闇にはまた闇の花……

と最後を長く曳いて、身體を左右に振ると、『右の片袖が窖に巣喰ふ大きな蝙蝠のやうに、ばたばたと壁の表面を羽搏くやうに打つた。唄の一節が終るか終らぬに、食卓の隅から頭の禿げた六十歳位の小男の老人が、突然跳び出して行つて『さ、息繼ぎだ、一杯キュッとやんなよ』。と云つた。『うめえぞ、ガンモ』。と一人が勵ました。

「ガンモ」と呼ばれた腕なしは、笑ひながら酒のコップを左手で受けて、一呼吸に呑み干すと空になつたのを突出して

『もう一杯くんなよ。』

『ホラしよ』と彼の身近かにゐた一人が、自分のコップを彼に渡した。

『うう、うめえなあ』。何物をも忘れて、心底から酒の裡に浸りきつたやうに、腕なしのガンモは呻吟いた。そしてどたりと崩れるやうに、腰掛けの上に身體を下ろすと、食卓に前半身をのめらせて、コツプのなかの酒を啜つた。

「ガンモ」と皆から呼ばれる通り、彼の顏は長い間の勞働の苦勞と、度を過した飲酒とのために燒け爛れたやうになつてゐる。太い皺と肪脂とで腫れ上つたやうになつた彼の顏のなかに、アルコホル中毒患者に見る熱病病みのやうな眼が光つてゐた。逞ましい頸筋は象の頸のやうにだぶついてゐた。ガンモはある工場で長い間働らいてゐたが、四五年前に誤つて機械に捲きこまれて、右手を肩からモギ取られて終つた。それで工場からは追ひ出される、僅かばかりの手當金は直ぐ食ひ潰して終ふ、それ以來彼はこの酒店を自分の住家のやうにして、廢物になつた自身の身體を支へてゐるのであつた。

『お前、その腕はどうしたんだ』。と理由を知らぬ客から訊ねられると、

『これかね、こりやお前え、何さ、ぐるぐるのぽきんぽきんさ』。と吐き出すやうに答へるのであつた。そして顏を顰めて、さも苦々しさうに地面に唾液を吐く。ガンモは食卓に凭れると、腕の上へ額をのせて、足下へぺつと唾液を吐いた。そして死骸のやうにじつとして眠りかけた。

龜キは先刻から、もう足腰の立たぬ程に醉つてゐた。太十は傍の男と何か無中になつて喋つてゐた。その男は鳥打帽を阿彌陀に冠つて、汚れ腐つた洋服の袖を捲くり上げて、大聲で太十に喚き散らしてゐた。

『さうだともよ。だから俺あ何時でもさう云ふとる。何もこの世の中あ、くよくよするにや當らねえつて』。かう云つて彼はまん圓な眼を剝き出すやうに、太十の顏を覗きこんだ。山猫と皆から渾名せられてゐるこの男は、誰もその素性を知つてゐる者はなかつた。山猫はこれと云ふ一定の職業は、ここへ來た最初から持つてゐなかつた。それでも彼は少しも喰ふことの心配はしなかつた。或時は乞食をした。その他の時は盗人になつた。彼は食物のある間は、誰も知らない彼の住家――船庫や倉庫のなかや、傳馬船の蔭――を泊り歩いた。食物が盡きて來ると、彼は町に姿を現して、乞食をしたり盗賊を働らいたりした。時々は警察の手に捉ることがあつ

ても、半月程すると、彼は再び大手を振つて町へ出て來るのであつた。何故なら、彼は盗人であると同時にまた、刑事の手先になつて仕事をもしてゐたから。この町の犯罪で、彼が緒口を嗅ぎつけたものも澤山にあつた。彼はまつたく山猫のやうに狡猾で、廿日鼠のやうに素早やかつた。

『山猫』と太十が彼を呼んだ。『お前のやうにして、世間を渡りや、ホンに苦勞はねえなあ』。泌泌とした聲でかう云つた。

『くよ〳〵して、何の利益があるんだよ』。と山猫が吼え立てた。『俺あ今夜も、ひとつ儲け仕事が發見かつてるんだ。』

太十は思はず全身をぴくりと痙攣させた。山猫が「夜の仕事」といふのは海岸の倉庫に忍び入るか、船盗賊にきまつてゐた。太十は今夜この山猫が盗み出す品物のことを想像して、彼の慾心は急に眼を覺した。彼は酒のために蒼くなつた頰を、ぴくりぴくり痙攣させ、無暗と唇を嚙みながら、山猫の方へ身を擦り寄せた。

『なあオイ、俺らにも一肩擔がせねえかよ』。と太十は山猫の耳に囁いた。

『うんにや、俺一人でいい。仕事は何時も俺一人ときまつとる』。と山猫は太根をがりがりと嚙みながら、愛想氣なく答へた。

『だけどお前、手が多くなりや品物も殖えるぢやねえか』。と太十は彼の腕を掴んだ。『よう、一緒に連れて行けよ』。

『そのかはり、人數だけの分前が出らあ』。山猫は眼の前の酒瓶から、喇叭飲みにごくりと酒を飲んだ。

『そんなこと言はねえでよ、山猫。同じ仲間ぢやねえか』。太十は何うしてもこの男を承知させずには置かぬと云ふ風に、粘りつよく話を持懸けた。『なあ、そのかはり此次には俺が船へ案内して仕事させるからよ。』

『五月蠅えツ』。と山猫はいきなり立上つた。『俺あ何時でも一人よ。加勢のゐるやうな仕事はしねえ極めなんだ。』

山猫はうなり聲を出して、太十を室の隅へ突飛ばした。『わつ』と誰やらが叫ぶと同時に、室中の人間が皆總立ちに立上つた。

『喧嘩だ、負けるなッ。』と一人が叫んだ。

『山猫つ。喰ひつけ。』

『誰だッ。俺の頭を毆ぐる奴は。』

『こん畜生。さあ來やがれ、面の皮アひん剝いてくれるぞッ。』

食器の壞れる音、卓の轉がる響、誰かを蹴りつける足音、腰掛けの蹈み碎かれる音、煙草と湯氣とで息も窒りさうな、外光も滿足に入つて來ぬ窖のやうななかで、皆は野獣のやうに相手かまはず摑み合つた。と、ふらふらと片隅から立上つたガンモが左手の拳を振り上げて唄ひ出した。

竪坑二千尺ドれば、地獄ヨー
末は廢坑の……

と、誰やらが突然にガンモを土間に投げたほした。そして盲目がまるで狂人のやうになつて、わけの判らぬ調子を手風琴で鳴らし出した。龜キは酒店の隅につくばつて、泳ぐやうな身體つきをしながら、この騒ぎには關係もなく嘔吐を吐いてゐるのであつた。

四

空には滿月が照つてゐた。冷々した海風がその空を吹いてゐた。白雲がきれぎれに、月の週圍を流れてゐた。微かな物の音ひとつ聞えない靜寂が四邊一面を支配してゐた。波打際が一筋白く、仄かな月光のドで遠く長く顫えてゐた。碇泊してゐる汽船も、今は晝間の活動をすつかり休止して、海底から跳び出して來た巨人ででもあるやうに、どつしりと眞黒な姿を海面に横へた。その檣はこの巨人が兩腕を伸して、空の雲でも引摑まうと待構えてゐるやうにも思はれた。燈火ひとつ見えぬ海の上では、沖から吹き寄せる海風に煽られて、さも心地よささうに波が笑ひさざめいてゐる。それが陸近く寄せて來て防波堤の蔭では毬のやうに膨くれ上つたり、

また伸びては縮んだりして、ざぶりッざぶり……ッと石垣に戯れてゐるのであつた。その石垣の暗闇に匿れてゐた小舟から、不意に三人の人影が現はれた。

山猫は素早く舟から跳び上つて、防波堤の石垣に抱きついた。彼の身體には一筋の縄が結びつけてあつた。その後から彼と同様に太十が石垣に跳びついた。彼は手を滑らして膝から下を海中に突こんだ。山猫は慌て太十を引擦り上げた。波がざぶりッと太十の腰を洗つて行つた。その隙に、傳馬船のなかに取残された龜キは、あせり氣味で舟の舷に片足をかけて跳び上らうとした。その瞬間、ひとつの大きな波が底の方から舟を一揺り揺つて、石垣に今にも舟諸共に打突けやうとしたかと思ふと、龜キは身體の中心を失つて、どぶんと海中に轉がりこんだ。

『龜キ』と叫んだ山猫の聲と一緒に、龜キの頭がひよいッと波間に出たかと思ふと、また海の中へ沈んだ。

『間抜め。』と山猫は吐き出すやうに呟きながら、防波堤の石垣を這ひ下つて、波の間に浮き沈みしてゐる、龜キの襟頸を素早く引掴んだ。そして石垣に添ふて防波堤の上へ引擦り上げた。

濡鼠になつて這ひ上つた龜キは、寒さに慄えながら。けつけつと掠れた聲を出して水を吐いた。彼は着物を脱いで眞裸となり、潮水に浸つた身體を拭いた。しかしいくら絞りとつても、着物はもう着られなかつた。彼は裸體のままで、慄えながらゐるより他はなかつた。そこで山猫は自分の股引を脱いで、龜キに穿かせた。太十は自分の肩に引懸けてゐた、ボロ外套を彼に貸してやつた。

『ほんとにドヂだなあ。縁起でもねえ』。と山猫は自分の素裸な兩脚を見ながら、忌々しさうに呟いた。

『まあさう怒るな。龜キは海には慣れてないんだ』。と太十が答へた。そして自分の濡れた腰から下を瞶めた。『俺あ寒い。』

『ぐずぐずしちや居られねえんだ。さあ、出懸けやうぜ。』機嫌をなほした山猫が、かう云つて先に立つて歩るき出した。

龜キの頭のなかでは、先刻から種々なことが旋風のやうに渦卷いてゐた。今日の晝過ぎ、彼が太十に出會ふまでは、彼は野良犬のやうに飢ゑてゐた。飢ゑのために彼の神經は狂ひさうなまでになつてゐた。彼は人生を呪ひ生存を呪ひ、金持が益々金持になり、貧乏人が愈々貧しくなつて行く、この社會組織を憎くんだ。そして絶望の極てに、彼は自分を殺すことを想像して、自殺の彼方に自分の希望を懸けやうとさへしてゐた。否、それを實現するのは、彼にとつても一歩の所まで來てゐた。彼は自分の肉體が飢ゑと衰弱とのために、刻々と磨り減らされて行くのを感じた。彼は自分が飢ゑて氣が狂ひかけてゐる傍で、飽食した人間どもが、いやいやながら肉や野菜を突つき散らしてゐるのを眺めても、その人間どもに對して抗議を持ちこむ術を知らなかつた。彼はそれら「飽食した豚」の群を憎くみながら、指をくわへて眺めてゐた。その時山猫が傍に來て、彼の心に「力」を吹きこんだ。

『若え衆、何もくよくよするにや當らねえぜ。……預けたものを、入用な時にや使へばいいさ。』

『何處から。』と龜キは訊ねた。

『何處からでもよ。』

『俺あ何も預けてねえぜ。』

『わからねえのかなあ』。山猫はかう云つて、狡猾さうに笑ひを洩した。

それは今日の夕方であつた。もう大抵醉も覺めかけてゐた。龜キは醉覺めの後の心の空しさと、失業者の持つ不安とに襲はれて悄然としてゐた。太十は食卓の上へ身體をのめらして、何も知らず熟睡してゐた。その傍で山猫は食卓の上へ座りこんで、豪然と親方氣取りの、しかし浮浪漢らしい親しさで、龜キにしきりと仲間入りを勸めた。まつたく龜キにとつては、一切の生活の道は閉がれてゐた。彼等のために飢ゑて死ぬか、それとも自分の生命の邪魔をしてゐる彼等を、この手で拂ひ退けるかのどちらかであつた。彼の心はぐらつき出した。

『さうだ、何物でもそれは、誰の物でもないんだ。さうだ、預け物を一寸取出して來て使ふことにしやう。』かう彼は最後に決心をした。それと同時に彼は、今迄彼がこの世間に持つてゐた執着一切を振り落した。何だか生れ變つて來たやうな心持が彼の胸一杯に滿ちて來た。彼が今

日まで憎くみ續けて來た「飽食した豚」の群に對して、これから自分は素裸になつて力づくで競爭するのだぞ、と云ふやうな氣持がした。彼は自分の生きる道が、はつきりして來るのを覺えた。自分がつい近頃まで使はれてゐた木材會社の、あの鋸の下に俺か彼奴等か、どちらかの頭を突込むことを考えて、彼の全身の血はその想像の快さにぴちぴちと、血管のなかで跳ねるやうな氣がした。彼の頭のなかには、眞赤な旋風が荒れ廻つた。

彼はこの新しい仕事に對する恐怖と不安、しかしその後で自分の手に握ぎることの出來る、夥しい財物に對する喜びと好奇心。彼の神經質な心は慄え、身體中の筋肉は引締つた。彼は素足で砂地を蹈みながら、いまかうして自分の通つて行く途が、自分の足跡で變化されてでも行くもののやうに考えた。彼は空を仰いで月を眺めた。月が何時もと少しも違はずに、空からこの地上を照してゐるのを不思議に思つた。三個の影が小さく砂上に落ちてゐた。彼はそれを眺めながら、眞夜半に近い時刻だな、と思ひながら歩いた。明日の晝間は、今日の晝間と同じに酒に醉つてゐられる、しかも前途の心配なく元氣で暮してゐられるんだ、とも考へた。彼の眼の前には大きな金貨銀貨の山が現れたり消えたりした。——何といふ愉快な男らしい仕事だ！と彼は考えた。自分の姿が次第に大きく擴がつて行く。想像はいろいろと彼を驅り立ててその未來に虹のやうなものを見せるのであつた。

三人は默々として砂濱を歩いて行く。

山猫は例の鳥打帽を阿彌陀に冠つて、背をかがめて大手を振つて悠々と歩いて行く。その後から太十が醉漢のやうに、ふらふらと歩いて行く。龜キはその傍を、これも寒さに慄へながら兩腕をしつかりと脇腹にくつつけて歩るきながら、時々、太十の顏を見ては

『お前え、どうしたんか。まだ醉つてるのか。』

『う……』。と太十は微かに答へたが、やがて彼は『ズボンが足に絡まつて歩けねえんだ』。と云ふ。

海はこの三個の奇怪な人影を笑ふやうに、ちらッちらッと白い波を、その紺碧の面に見せてゐる。弓形に長く腕を伸して海を抱くやうにしてゐる波打際の果てに、巖のやうに續く建物が

見えた。背後に丘を負つて、海中へ高く築きあげた石垣の上に、その建物は建つてゐた。山猫等三人の者達が狙つた、今夜の獲物はこの建物（倉庫）であつた。今日の午後、荷揚を終つたばかりの倉庫は、遠くから三人を招いてゐるやうに思はれた。潮氣を含んでゐる海風は、三人の熱した頰を吹き、鼻腔を刺戟して勇氣づけた。月光が時々雲に遮ぎられて、地上や海上が暗くなり明るくなりした。三人の影は砂上に躍るやうに明滅した。さつと波が彼等の足を洗つては、白泡をそこに殘して海中へ逃げて行く。その後には砂が何事かを不平さうに、ぶつぶつと呟く。山猫は波の來る度に、足を擧げてその頭波を蹴飛ばした。そして『畜生、畜生めッ』と快ささうに云つた。

『どうしたんだ』。と太十が訊ねた。

『今夜は運がいいんだぞ』。山猫はにこにこ笑ひながら、機嫌よくかう答へた。

『どうしてだ』。と龜キがまた訊ねた。

『俺の左の耳が鳴つてるんだい』。山猫は彼自身の不思議な豫覺を持つてゐた。そしてそれを固

く信じてゐた。

建並ぶ倉庫の姿は三人の前に、もうはつきりと見えた。海の方を向いた扉が、闇のなかでも白く光つてゐた。傳馬船が幾艘も波に搖られながら、海中へ突出した棧橋の影に浮いてゐた。

三人は急いで、その闇のなかへ走りこんだ。

五

倉庫のなかは寂然としてゐた。三人の呼吸が微かに闇のなかに傳はるほかは、蟲の音ひとつしなかつた。眞暗で冷々として、そして啞のやうに默つてゐた、庫は自分の腹のなかで何事がされてゐやうと、それは自分に關係はないのだ、と云はんばかりに見えた。海から吹き込む冷たい風が、この澱んだ倉庫のなかへ、新しい水のやうに流れこんだ。一尺ばかり引開けたままになつてゐる、扉の外には白々とした海と空とが、まるでスクリーンに映る寫眞の切目のやうに光つてゐた。山猫は阿彌陀に冠つた帽子を脱いで、額の汗を拭き冷たい海風を胸一杯に吸ひ

こんだ。

『オイ、太十』。と山猫は小さな聲で呼んだ『お前え、其處の箱の繩を切れやい。そして龜キあ袋んなかへ品物を詰め込めや』。かう云つて山猫は、懐中電燈をぱつと照した。

その光りのなかに照し出された木箱は、今朝船から揚げたばかりのもので、まだ潮の香の泌みついてゐるやうな品であつた。龜キと太十はその繩を、ぷつり切り取つた。そして蓋の釘を引抜いた。

『兄貴、此奴ア素張らしいもんだ』。と太十が云つた。

『そんなこたあ、云はねえだつていいよ。俺の睨を附けた品物だ。間違つこは無えや』。と山猫はそれでも箱の中を覗き込んだ。

龜キと太十はせつせと箱の中から品物を取り出した。山猫は懐中電燈で、二人の手許を照しながら、にこにこと笑ひ續けた。何時も人氣の少い倉の内の空氣には、黴と潮氣との匂が浸み込んでゐた。乾いたこゝの無ささうな土間からは、氣持の惡るい冷たさが、三人の足裏に傳つ

で來た。龜キは生れて始めてする盗賊に、不思議な昂奮と恐怖とが混り合つて、絶間もなしに身體を、ぶるぶると慄はせ通した。

箱の中の品物は、太十の手で片端から、無雜作に掴み出された。そして、その中から龜キの指先で選り別けられて、袋の中へ詰め込まれた。三人は獲物に醉つたやうな心持で、山猫は平常の癖になつてゐる唄を、鼻先で唄ひだした。

『うん、此女ア素敵だ。まつたく素敵な別品さんだよ、お孃さんだよ』。と二人にからかつた。

その時、不意に街道に面した方の倉庫の口が、微かに軋みながらそつと開いた。山猫は彼特有の敏感さで、すぐそれが誰であるかを感づいた。彼は要心深かく、懐中電燈の灯を隱しながら、太十の顏に口を近寄せて、箱から品物を取出すのに、無中になつてゐる彼の耳許へ

『靜かにしねえ。來やがつたよ』。と呼いた。

『えつ、何が』。と太十は吃驚して、箱から手を出して、山猫の顏を不審さうに瞶めた。

『判らねえのかよ。倉番の野郎だ』。

『倉―番ッ』。と太十は呼吸の窒るやうな思ひがした。そして背中がぞつと寒くなつた。

『何だねえ』。と龜キも山猫の方へ近寄つて行つた。

『倉番が發見けたんだ。早く品物を背負つちまへ。後は俺が引受けるから、お前えらあ、早く舟へ逃げるんだ』と山猫は齒を喰ひ縛つて、うめくやうな聲を洩した。

ことり、ことり、ことりと忍び足で近寄つて來る番人の足音が、薄氣味惡るく三人の耳に聞えた。倉庫の内の濕つぽい空氣が、三人の顏に粘りつくやうな、不快な氣がした。龜キと太十は品物を詰め込んだ袋の口を、ぎゆつと引締めに懸つた。然し今にも誰かの手で、襟頭を引摑まれさうな氣がして、絶えず指先がぶるぶると慄えた。そして袋の紐がその指先に絡まつた。

『オイ、早くしねえかよ。頓智喜な野郎だぜ』。と山猫は苛々して焦き立てた。そして咽喉をごろごろ鳴らせた。

『畜生、今に見やがれ。もう一分間ぐずついて見ろ、手前達あ締め殺してやるから』。と山猫はまた猛獸のやうに呻吟いた。そして顏色が急に血走つて來た。

その瞬間。

『誰だつ』。と番人が不意に怒鳴つた。その聲に倉庫中が、一時にがあんと鳴り響いた。そして角燈の光りが、積荷の間から、さつと三人の足下の方へ流れて來た。

『逃げろ、畜生めつ』。と山猫は喚いた。『後は俺が引受けたんだ。さあ來い『老耄奴』。

『ごろ――ぼーうつ』。と妙に引伸したやうな、番人の聲が靜かな冷々とした闇の中に、また響き渉つた。

『お前え、大丈夫か』。と心細さうに太十は訊ねた。

『大丈夫だ。お前達あ早く逃げろ。品物が肝心だ』。

『ぢや、早く來なよ』。

かう云つて龜キと太十は袋を肩に擔いだ。その背後から山猫が顏を敵の方に向けながら、要心深くじりじりと後退りして行つた。懐中電燈を消して終つて、眞暗ななかを三人は搜ぐり足で遁げ出した。龜キは背中に背負つた袋が、歩るく度にふらふらとして、闇のなかで幾度も躓

きさうになつた。太十の手が始終、彼の肩のところに觸つてゐた。太十は濡れてゐるズボンが足先に絡まつて、思ふやうに歩けなかつた。彼は先登になつて歩いてゐる龜キの、肩を頼りにして、引擦られるやうにして歩いて行つた。二人は漸くのことで、扉のところまで來た。龜キはほつとして、戸外へ走り出やうとした。すると何物かが不意に彼の頸筋を掴まえたやうに、彼を無理に後へ引戻した。

『慌てるな、龜キ』と太十が背後から呼んだ

『う……』と云つて彼が顔を振向けると、背中の荷物が、狹い扉口に狹つて、彼の前へ出るのを邪魔してゐるのであつた。

『待て。』太十はかう云つて、自分の抱えてゐた袋を下にをろして、扉に兩手かけた。

しかしその時、既に靴音が二人の背後に迫つてゐた。角燈の光りが彼等の背に達く位の近さまで、彼等の追跡者は來ゐた。扉はぐわらッぐわらッと烈しい音を立てて、勢よく開いた。龜キは何者かに突飛ばされたやうに、戸の外の沙濱へ轉がり出た。袋は彼の背中を離れて、波打

際の方へ轉がつて行つた。彼が夢中で再び起き上つて、袋の方へ駈け寄らうとした瞬間に、彼は自分の背中で、『わつ』と叫び聲を擧げた太十の聲を聞いた。驚ろいて振返らうとした刹那に、太十の身體が毬のやうに飛んで來て、彼の腰にぶつつかつた。二人はなぎ倒されたやうに、ころころと轉がつた。そしてもう何もかも忘れて終つて、遁げたいと思ふ一心で、砂の上を四つ這ひに這ひながら、海の方へ夢中になつて逃げ出した。後から山猫が袋を引抱えて、呼吸をぜいぜい鳴らしながら遁げて來た。追跡して來た倉庫番の手は、山猫の頭を掴みさうなまでに、近寄つて來てゐた。太十と龜キは海岸まで逃げて來て、これから先は海の中へ飛びこむより他に遁路はなくなつてゐた。二人は海岸の石垣の端れに立つて、まごまごと四邊を見渡してゐた。月下に擴がつた海が獸の牙のやうな白波を立てて、追ひつめられた二人の盜賊を嘲笑つてゐた。

しかし遂々、山猫は倉庫番に引摑まれた。彼は抱えてゐた袋を投げ出すと、死物狂ひになつて、番人に飛び懸つて行つた。と、二人は組合つたまま、一塊の襤褸布のやうになつて、轉がり揉みあつた。番人は逞い逞ましい腕で、山猫の頸を締めあげた。山猫は組み敷かれて咽喉を

締めつけられながら、下から番人の腰を蹴らうとして焦つた。しかし咽喉は次第に締つて行つた。もう今にも呼吸が止まりさうな程に、苦しくなり涎がだらだらと流れ出した。山猫は死物狂ひの勢で、『ひーひーひいつ……』と奇妙な泣くのか笑ふのか得體の知れぬ、狂人のやうな叫び聲を張りあげた。

この聲が石垣の上で、恐怖に襲はれて腰の抜けたやうに立竦んでゐた龜キの腹の底へ、何とも形容のできぬ、物凄い衝動を與へた。彼の全身は強烈な電氣にかけられたやうに、棒のやうに硬直して、頭が誰かに毆ぐられたやうに感じた。彼はふらふらツとなつて、殺されかけてゐる山猫の方へ駈け出した。と、直ぐ彼の足下の石に躓いて、ばつたり倒れた。しかし彼は直ぐ起き上つた。起き上つた時には、その石を片手に掴んでゐた。

彼はそれを頭の上に振上げると、暫らく無言のまま、倉庫番人を睨めてゐたが、不意にその石を番人の腰の邊りにたたきつけた。番人の身體は、ぐにやりとなつて、山猫を締めつけてゐる兩腕からは、急に力が抜けて行つた。山猫は番人を跳ね退けて、元氣よく立上つた。

『さあ、早くしねえか』。と山猫は自分が今少しで死に懸けたことも、忘れたやうに元氣のいい聲を出した。

龜キは急に自分の身體に、力が充滿してゐるのを感じた。彼は一番重さうな袋を、肩に擔いだ。太十も山猫も今夜の獲物を肩に載せて歩き出した。

『爺(ぢやぢ)、朝までさうやつて休んでゐなよ。朝になりや、誰かが迎へに來てくれらあ』。と山猫は振返つて云つた。

『くすッ』。と龜キも笑つた。『爺(とつさん)、まあ機嫌よく暮しなよ。生命にや別狀ねえんだからなあ』。

『う……う、うん』。と倉庫番は砂の上に身體を長々と伸しながら呻吟いた。

『さあ行かうぜ。朝までに品物の仕末をつけなきや、デカに捉つたら、それこそ此方等(こちらとら)あ、お阿佛だあ』。と山猫は喜ばしさうに二人を促した。

『よし來たつ』。と二人はそれに應じた。そして浪打際を舟の方へ急足で歩いて行つた。

もう夜の明けるに近かつた。月は靜かに海の上を照らして、空には雲の影もなくなつた。そ

して曉近い水平線の上には、霧のやうに白いものが立登つてゐた。碇泊の汽船の甲版では、昨夜遊廓へでも泊つた同僚達を迎へに行く仲間であらうか、ボートを下ろす準備に取懸つてゐる人影が動いてゐた。三人の夜盗は黎明の風の冷たさに身慄ひしながら、濱傳ひに自分達の小舟の方へ急いだ。その背後からは海が大聲あげて笑ふやうに、ざぶりッざぶりッと白泡を立てて三人の足跡を消して行つた。

いまこの地方を旅行する人は泥棒龜と噂されてゐる、有名な盗人の話を、何處の家でもよく聞かされる。そして子供達が描く繪のなかに、一人の青年が巖のやうな石を、兩手で高くさし上げて、洋服を着た立派な男を目懸けて打下ろさうとしてゐる種類のものをよく見せられるだろう。（大正十二年五月）

小さな町の出來事

一

この小さな、永遠の昏睡に落ちてゐるやうな、田舎の町にも、恐ろしい地震の噂話で持切つてゐた。汽車の到着するごとに、町の住民達は、停車場へ降りる人達のなかから、顔見知りの知人を促へて、何か新らしい珍らしい事件を聞き出しては、自分達の好奇心を満足させやうと努めた。

停車場はこれらの閑人の群や、乗降客で絶えず混雑した。毎日一定の時間に出る新聞の號外の鈴の音が、町の人達の心を底の方から引搔き廻すやうに緊張させ、また不安にさせた。號外の出る度に停車場にゐる人達も、申合せをしたやうに、一齊に眼を輝かせて、町の通筋の方を振返つて眺めた。

それは一九二三年の九月の十日頃であつた。恐ろしい噂が――それは地震、大火災、帝都全滅といふやうな刺戟の強い語よりも以上に、恐ろしい奇怪な、あり得べからざるやうな噂が傳はり出した。人々は今にも、この片僻な小さな町にも、大變な事件が持ち上るかも知れないといふ恐怖で、まるで憑きもののした人間のやうに、その事ばかりをうるさく話しあつた。

ちやうど、鐵瓶の中を水が沸ぎつて底の方から水玉になつて水面へ跳び上つたり、湯氣になつて瓶の口から騒々しく吹き出すのと似通つた光景であつた。停車場がちやうど、その瓶の口みたやうであつた。

『井戸を何よりも氣をつけなければ危いといふ話でさあ。そこを彼奴等は何よりも狙ふんださうで。』

『東海道筋を逃げて來た連中は、あらかた箱根で軍隊の手でやつツけたといふんですが、然し要心はしなくてはいけませんよ。』

秘密な、出所の不明な、曖昧で卑怯な、そして人間の良心を滅ぼさうとする企らみは、見事に成効して、それは水面に落ちた小石が波紋を描いて、次第次第に擴がつて行くやうに、この家庭にもここの集會をも支配するやうになつた。

そしてこの噂が沸き立つてゐる最中に、その噂がただの噂ではなく眞實のことであるのを證明するやうな事件が、この町の人達の眼の前に見せつけられた。

この町でも地位もあり名望も――その名望はたとへ財産と權力とで押えつけられて、無理强ひにされたものではあつても、兎も角名望には相違なかつたから――ある、一人の立派な紳士、つまり簡單に說明して終へば、この町のある會社の支配人を勤めてゐる一人の男が、旅行先の震災地から突然に歸つて來た。家族の者達は、無論この男が旅行先で死んだことだらうと想像してゐた。否、家族の者達ばかりでなく、町の大抵の人達はさう考えてゐた。そこへ突然に何の先觸れもなしに、思ひ懸けなく汽車の中からプラットフォムへ彼が跳び降りたので、そこに居合せた人達は、誰も彼もびつくりした。然し次の一瞬間には、彼は英雄のやうに皆の者から迎へられた。豪慢で餘り利巧でもない彼も、さすがに少しその歡迎の方法が大袈裟なのを感じて恥

しさにまごついた。けれど彼の周圍を取卷いて終つた人達は、何でも彼でも彼を英雄のやうにして終はなければ、彼等の好奇心が滿足しなかつた。彼等は支配人の口から、いろいろその男敢な、また血腥ぐさい冒險談を聞くことを要求した。この男の良心は一二分の間は昂奮した群衆の要求に反對して爭つたが、すぐ群衆の心理の浪のなかに溺れこんだ。さういふよりも寧ろ、彼は自分の外見のために、またこけをどしの名譽のためにも、是非とも嘘を吐かなければならぬ狀態に押し詰められた。

『いや有難ふ、皆さん。私は彼方で死ぬやうな恐ろしい眼に會ひました。いや有難ふ、有難ふ皆さん。よくまあ自分は死なずにかうして歸れたと思ひます。今でも、此處にかうして皆さんの顏を眺めてゐても、それがまるで夢のやうな氣がします。恐ろしいことです。』

然し彼の顏や眼は、まるで花の咲いたやうに明るく美しく輝き、唇には樂しさうな微笑がこぼれてゐた。

『暴動はどうですか。』と誰かが突然に質問を出した。

『ああそれです。』と支配人は左手の指で額をごしごし擦りながら、まるでそこから自分の考えを吐き出しでもするやうに『私は幾度殺されやうとしたか知れませんよ。爆彈が破裂するのです。否、實際私は現に自分の眼の前で、毒の入つた饅重を喰はされて死んだ子供を見たのですよ。』――馬鹿、馬鹿、馬鹿！　自分は何といふ嘘を皆の者の前で吐いてゐるのだ、と思ひながら、彼はある不可抗的な氣分に支配されて喋り續けた。聽衆は自分達の好奇心が滿足させられて行く喜びにうたれて、まるで活動のフィルムの廻轉を眺めるやうな心持で、語手の顏や唇をじつと瞶めながら

『それからどうした。それから――』といふ風にその眼附が催促してゐた。

然し話は續けることができなかつた。そこへこの町の新聞社の社員が駈けつけて、支配人を自動車に乘せて、彼の宅へ送り届けやうと告げた。新聞記者はかうして、この支配人を完全に自分だけで占領して、明日の朝刊の特別記事をこの男から貰はうといふ腹であつた。そればかりでなく巡査が來てこの群集に解散を命じ、疲れてゐるだらうと思はれる支配人を、少しでも

早く宅へ歸らすことが、自分のすべき勤めだと考えた。そしてその事が支配人の家族から好意を持たれて、その結果は何時かは自分の利益となつて現れるに相違ないとも考えた。

『それでは、これで失禮します。』かう云つて支配人は自動車に乘つて、彼を英雄のやうに迎へた人達を後に殘して、自分の宅へ歸つて行つた。

これが事件の口火であつた。その翌日の新聞から、關東大震災實見記が連載せられるやうになつた。さうして帝國主義的な反動氣勢が、この小さな町の永遠の眠りを、少しづゝ覺して行つた。

その時、また一つの新しい噂が何處からともなく聞え出した。

『保田平吉が歸つて來た。』

『まだ歸つてはゐない。しかし二三日中に歸つて來るさうだ。』

『そんな筈はないよ。歸つてる、僕は昨日保田に出會つたから――確に保田だつたよ。』

然しこの噂はごく一部の人達の間だけで、まだ町中には擴がつてはゐなかつた。

二

汽車がまだすつかり止まりきらぬ内に、保田平吉は扉を開けてプラットフォムに跳び降りた。彼は鼠色に汚れた白地のズボンに、これも同じやうに薄赤く汗の染み出てゐる「茶つ葉」色の工場服を着て、片手に小さな風呂敷包を提げてゐた。パナマ帽子の中古なのを阿彌陀冠りにした顏をあげて、珍らしさうに四邊りを見廻した。

彼が十年程も昔に、この町を出る時には、まだ鐵道はこの町を通つてゐなかつた。その時は彼は汽船でこの町を離れたのであつた。しかも眞夜半に――午前二時に出帆する汽船の甲版客となつて、まるで夜逃げでもするやうにして出立した。それが今度、十年振りで歸つて見ると、昔は田圃の眞中であつた筈の所に停車場ができ、それから昔の町の方へ眞直に廣い街道がついて、その兩側には家が建並んで、蛙の啼いてゐた田圃の上には、何時しか町ができて終つてゐた。

彼は街路樹のアカシヤの葉が、九月末の涼しい風にばさ〳〵と鳴る下を歩いて行つた。少年

の頃の思ひ出をそのままに殘してゐる、昔馴染の山が、町の周圍にやはり昔のやうに聳え立つてゐた。長い間都會の濁つた空氣のなかに生きて來て、殊にこの一ケ月程は暗い光と惡臭の染みこんだ、炭素分の多い重い乾いた空氣のなかに、呼吸をしつゞけて來た彼の肺には、この町の空氣は水のやうに濕つぽく爽かに感ぜられた。

靜かだ！と彼は心の中で思つた。これから暫らくの間は、過去の生活から切り離れて、この靜かな孤獨の裡で生活を樂しむことができるのだ！と彼はかう考え續けた。生活を樂む、といふ語ほど、とりわけて孤獨な生活を樂むことができるといふ語ほど、彼の心を强く誘惑するものはなかつた。彼は眞實に疲れてゐたのだ、疲れきつてゐたのだ、そして今はもう何でもいいから、默つて打倒れて休息したかつたのである。一人になつて總てのものから切り離されて——だから彼は追放されると、すぐ故鄕の町はづれにある草深い自分の生れた家を、その休息場所に選びあげた。彼の幻の裡には、草の茂つた廣い空地、その空地の彼方此方にある果樹、それらの根を灌ぐやうにして流れる小さな水の流れ、それから小鳥、雲、空に照る太陽。しかしその何ものよりも彼を誘惑したものは、それらを立籠めて匂ふ、爽かな健康な田園にのみあるものの香り、そしてその香りのなかで一人になつて、何時までも飽きることなく續けられる瞑想であつた。

然しこの町は十年の間に、何といふ變り方をしたのであらう。彼は停車場へ立つた瞬間に、自分の幻想がその一片も殘さず、瓦斯のやうに空氣中に飛び散つて終つたのを感じた。それにもかかはらず、彼は靜寂を感じ、孤獨な生活を續けられると確く信じた。

やがて河が彼の眼の前に擴がつた。彼はその岸に沿つて歩いて行つた。河の水はうす綠に美しく澄みきつてゐた。河底の小石の數も數へることができる程であつた。魚の影がきらきらと河底に映つた。彼の心はほつとして、何か薄いベヱルにでも包まれてゐるやうな心持であつた。彼は誰にも知つた顏——昔の記憶に殘つてゐるやうな顏の一つにも、出會はなかつたことを喜んだ。誰も彼も皆彼には始めてのやうに思へたし、また他人も彼と同じである筈だと思つた。それにこの町の人達が、たへと一人でも彼が歸つて來るなどとは、思つてゐる筈がないと

信じてゐた。

何處かで寺の鐘が鳴り出した。夕暮の濕つぽい風が、河面を撫でて水の上に小さな皺を彼方此方に搔き寄せた。

『何もかも昔の通りだ。あの寺の鐘は昔の通りに夕方の五時に鳴らすのだ。僕の子供の頃からさうだつた。』

彼は橋を渡つて、町を離れて村へ入つた。村の入口に、大きな石の標柱が立つてゐた。それは何のためにあるのか知らないけれど、やはり彼の少年時代から、何といふことなしに建ててあつた。彼は懐しさうにその石柱を掌で觸つてみた。すると不意にまるで傷口に指を突込まれた時のやうな、跳び上る程の疼きを心の中に彼は感じた。そして一瞬間の迅さで、その時の思ひ出がばつと彼の全心を照らした。

彼の少年時代には、彼の一家はひどい窮乏に追はれ通した。彼の家には雨傘一本すらなかつた爲めに、雨の日には彼と彼の兄弟とは學校を休まなければならなかつた。飯のかはりに大根

や菜や芋の混じつた汁を、一家五人の者——母とその子供達と——が一つの鍋から爭ひ合つて、胃の中へつめ込まなければならぬこともあつた。彼と彼の兄弟達は、何となく村の少年達から孤立してゐるやうに、自ら感じつづけてゐた。貧窮は彼の少年時代から、その額に痛ましい烙印を押した。ある夜更けに彼は母と一緒に連れ立つて、近所の地主の畑へ出かけて、芋を一畝だけ掘り起して、夜の明け方までかかつて、それを悉く自分の家へ運んで終つた。その日彼は學校へ行つても絶えず心が憂鬱になつた。惱ましい、鉛のやうな重苦しさが、忘れる隙もなく胃のあたりを壓えつけた。できるなら、今朝喰つたのをも吐き出して、それと一緒に家に置してある芋と一緒に、昨夜の畑へ持つて行つて棄てて終ひたかつた。彼は全身が汚れてゐるやうな氣がして、何度となく身體中を調べた。あれ程までに彼を愛した母が、今は憎惡の念なしには、母の姿を眼の前に思ひ浮かべることができなかつた。

然しそれは彼が學校から歸ると同時に、まるで反對になつて終つた。學校から歸つた彼が、例の憎む可き芋がどうしてゐるかと、それを見に臺所の隅へ行くと、其處には今朝よりも澤山

の、そして思ひも懸けぬ芋以外の、葱や大根や其他の野菜物に、米の入つた袋さへ芋と同居して、學校歸りの彼を歡迎するやうに見えた。

『これぢうしたんや、母さん』と彼はびつくりして聲をあげた。

然し母が暗い聲でその事情を説明して聞かせた時に、彼はこれらの品物の送り主である、例の地主に對して、自分の身體がずた〳〵に引裂かれるやうな痛みを感じた。彼はその地主の慈悲心が、彼自身の存在を蹂み躙つたやうな脅迫を感じた。

ちえつ！

彼は自分の舌を嚙み切つて、そこから噴き出す血を、慈悲深い宏量な地主の顏に吐きかけてやりたいやうな、混亂した憤りを感じた。血がさつと彼の顏に逆流した。そしてこの瞬間から、彼の將來――今日のやうな運命の日が展開して行つたのであつた。

それは彼が十四歳の冬の始めであつた。この苦い思ひ出が、一瞬間、彼の眼の前に羽ばたきをしてすぐ闇のなかに消えて終つた。彼はその記憶を後方へ振り放すやうに、石柱から離れて歩き出した。

そこはもう確實に村の地面であつた。彼が生れて育つて來た、いろ〳〵の苦い愛着を持つてゐる昔の家が殘つてゐる、村の地面であつた。然し一目彼が村の光景を眺め廻した時に、十年前とはびつくりする程に、村が寂れてゐるのをすぐ判斷することができた。十年前にあつた家の、三分の一はどこへ行つたのか姿もなくなつてゐた。そしてその跡はまるで齒のぬけたやうに空洞になつてゐた。樹は多く切りたほされて、村は明かるくなつてゐた。そして耕作もされずに打棄てられて、草の茂るに任せた田や畑が、彼方此方にあつた。

九月だといふのに、それはまるで冬の眞中のやうな、冷たさの漂よつた寂れ方だ。日の光のなかに白々と蛇の拔殼のやうに横はつた路の上には、風に捲き上げられる白い埃の亂舞が、騷擾が、音もなく演ぜられてゐた。

彼は久し振で、自分の生れて育つた昔の家の門口に立つた。家の光景は十年昔と同じやうに、古びて灰色に染つて傾きかけてゐる。その週圍の廢園は、昔よりももつとひどく廢れて、足の

踏みこみ場もない程に雜草が茂つてゐる。彼の心臟は懷しさに、締つけられるやうな息苦しさを覺えた。

三

保田平吉が〇町のK村へ歸つて來たことは、その翌る日の午前中に、すぐ町の人達の間に擴まつた。

この新しい話の種を世間に觸れて歩いたのは、K村の百姓の一人であつた。彼はもう六十歳に近かつたが、財産家ではなかつたが元氣でお喋りで、村でも有力家なので、役人連中に懇意を澤山に持つてゐた。彼は保田平吉が歸宅したことを、その晩に聞きこんだ。そして夜の明けるのを待ち兼ねるやうにして、翌る日の朝早く、平吉の家へ出かけて行つた。

平吉はちやうど起き出したばかりの所で、裏の畠の雜草のなかに蹈みこんで、柿の實をもぎ採つてゐた。そこへこの百姓はのそのそと近寄つて行つて、突然に聲をかけた。

『平吉どん、戻つただかね。久し振やの。』

『えつ』と云つて平吉は柿の樹の枝にかけてゐた手を止めて、頭をねぢ向けて振返つた。そして一人の百姓姿の老人を見た。平吉には一寸の間、それが誰だか思ひ出せなかつた。

『東京の方はえらい事ぢやつたのそんでも無事なので何よりぢやわい。何時、戻つただか。昨夜戻つただかねえ』。と老人は喋り續けた。

『まあ家へ入つて下さい』。かう云つて、漸くその老人のことを思ひ出した平吉は、雜草の中から出て來て、茶の間の方へその老人を連れて來た。

平吉の母は臺所の土間で、釜の下の火を吹いてゐた。濃い煙がむくむくと雲のやうになつて、家内から外へ流れ出してゐた。唯一人この家に母と一緒に殘つてゐる、一番末の弟はまだ寢床の中で、小さい寢息を幸福さうに立ててゐた。

この百姓は二十分程も、平吉の家で取とめのない、無駄話をしてから歸つて行つた。そして朝飯を濟ますとすぐ、町の郡役所のなかにある農會の事務所へ行つて、今朝のこゝを珍らしさ

うに喋り散らした。

『平吉が歸つとるぞ。あの保田の家の息子が』。と彼は誰彼の差別なしに吹聽した『東京から追ひ出されて來たんぢやさうな。それでもまあ、よう無事で生命を救かつたもんぢや。今度の地震では、彼等の仲間は大抵殺されたといふことぢやに』。

『保田の平吉が歸つて來たんか、また厄介なことが持ち上らにやよいがの。警察ではもう知つとるぢやろうか』。と農會の事務員は彼の顏を眺めた。

『どうだか知らん』。と百姓は答へた。

『昨日も渡邊さん（高等係刑事）が來て、保田平吉が歸つとると云ふ噂ぢやけれど、ほんとか知らんと俺に訊ねとつたぞ。彼は何か惡いことでもしたのかのう』。

『そんなことは俺も知らんが、警察が調べに來るやうでは、どうせ錄なことぢやあろまい』。

『何にしても物騷なことぢや。どうぢやろ、警察へ知らせて置いた方が、よくはあろまいか』。

と農會の事務員は百姓の同意を得やうとするやうに、彼の眼をじつと眺めた。

『それがええ、それがええ』。と百姓もすぐさま事務員の意見に贊成した。

かうしてこの噂は警察方面へも傳つて行つた。また農會事務所での無駄話は、郡役所ぢうにも擴がつた。

四

その時刻に平吉は、日當りのいい緣に寢そべつて、彼が長い間の空想の裡に樂んで來た、田舍のかなり窓屈な、しかし心を亂されない生活の第一日を樂んでゐた。弟は學校へ行つたし、母は井戸のところで彼の着物を洗濯してゐた。その水を流す音が、彼の心を遠い昔の少年時代に攫つて行つた。彼は今までにない靜かな孤獨——都會にゐた時のやうな煩はしく騷がしく、それで總てのものから突放されたやうな孤獨ではない——の環境に浸りきつてゐた。

どの室へ入つて見ても、微黴の匂ひがする。どの器具に手を觸れてみても、色は褪め、これにも黴の匂ひが附着いてゐる。古ぼけて、齡が老つて今にも倒れさうに腰を曲めた家全體は、

まるで頭髪が眞白くなつて、身體中が皺だらけになつて、腰の曲つた自分の母親そつくりだ。この家は母親と一緒に齢をとり、そして母親の死ぬ時には、家も一緒に倒れて終ふのだらう。母も化物のやうに齢を老つて終つたけれど、この家も同じやうに化物のやうだ。何處を見ても皺がある、それも溝のやうに深い大きな皺だ――と平吉はこんなことを考えてゐた。遠い遠い昔の剝げ落ちた壁畫のやうに朧な、懷しい物や人の肖像が彼の胸に微に微に蘇生る。そこには、ほんの一片の騒がしい感情すらも彩られてはゐない。それはまるで遠い昔の物の本を、一頁一頁と靜かに讀んで行くやうである。この夢のやうな世界のなかを、濃い爽かな匂ひと光が、二筋の絲となつて縫つて行く。彼の眼の前にある廢園を照らす太陽の光と、それに蒸されて匂ふ土と雜草との香りである。そしてこの匂ひと光は、彼の眞晝の夢のなかの、人間や物の姿を包んで、祭壇の前の燈火や燻ゆる香のゆらぎのやうに、彼の疲れた魂を果もない想像の世界へ沈めるのであつた。

――何故、自分はかういふことを考えてはならないのか。自分はかういふ世界のなかに、自分

一人を樂ませることは、かういふ世界を持たうとしても持ち得られない人々に對して、罪を犯すことになるのであらうか――萬人がパンに充分な滿足を持ち得られない時代に、菓子を食ふことは罪惡だ、と云つた人の語は確に正しい。然しさう云つた人の親友のなかの一人は、その眞理を承認しながらも、なほ菓子の袋をポケットに絕えず入れてゐた。そこに人間として價値も親しみもある。人間はどんなにしたつて、やはり人間であつて、人形でもなければ機械でもない。人々は何故もつと感情を解放して自由にならうとはしないのか。感情を解放することが、吾々の運動の妨げになるといふのか。それで吾々の運動の神聖が汚され、滅びるとでもいふのか。然し解放は解放であつて、どんなことをしたつても、放恣であり得やう筈がないではないか。自然を樂む感情、少しばかりの菓子を食ふ自由――その感情を殺し、その自由を束縛しなければ、吾々の運動は滅びるといふのだらうか。もし、さうだとするならば、それは何といふ呪はしい鐵則だらう。それでは自分達は一つの權力に對して、他の別な權力を置き換えたに過ぎなくなるではないか。さうあつてはならない、自分達はもつと自由に呼吸をしなければならない。

生命を享樂もしなければならない。その生命の享樂を萬人のものとするためには、〇〇〇〇的な一切の權力、生命の享樂を脅かす一切の權力に對して少しの妥協もなく抗爭する……

『ごめん下さい』と云ふ聲が、突然に彼の考えを此處で中斷して終つた――その爲めには合法的であることばかりが、一切の解決を齎すものではない、決して、決してそれが解決ではない。〇〇も時には重要な、また偉大な役目を勤める。今度の地震の經驗はそのことを教えた。

『ごめんなさい、ごめんなさい。誰も居らんのかねえ』。玄關でかう怒鳴つてゐる來訪者の聲は、少し苛立つて來たらしく肝高く響いた。

平吉はもうその先きを考えることを中止して、どんな人間が訪ねて來たのかと、興味をそそられながら玄關へ出て行つた。

『お歸へりでしたか』。と平吉の見も知らぬ來訪者は、さも長年の馴染のやうな挨拶をして、一枚の名刺を彼に差出した。

『何か用事なんかね』。と平吉は名刺を眺めながら、無愛想にかう云つた。

『實は署長が貴方の歸られたことを聞かれて、一度お目に懸つて置きたいと申しますので、御暇の時に一寸、署まで御立寄り願はれませんでせうか』。と來訪者は云つた。

『僕は忙しいんですよ』。と平吉は面倒さうに答へた。

『決してお手間はとらせませんから、唯ほんの一寸だけ會つて頂ければいいんです』。

『どんな用事なんだ』。

『それは此方は知りませんがね。來てくれと云ふのだから、貴方も素直に來たらいいでせう』。

『何だいその言ひ草は。僕を罪人扱ひにして』。と平吉は不快な顏色を遠慮なく彼に見せつけて

『僕はこの二三日中は何處へも出ない積もりだ』。

『そんなに忙しいのですか。どんな用事があるんだね』。と來訪者は云つた。

『これから毎日晝寢をしなけりやならんから、忙しくつて他人に會つちやゐられない』。

この氣違ひ染みた返答には、さすがに圖々しい來訪者も、はじかれたやうな氣持で、顏を歪めて苦笑した。

『それでは來て下さいよ。さう報告して置きますから』。かう棄世辭のやうなことを云ふと、とばとばと彼は出て行つた。

その後姿を眺めながら、平吉はくすくすと笑ひながら、そこに凝つと立つてゐた。が、裏の林の中で百舌鳥が、咽喉の引裂けるやうな聲を出して啼いてゐるのを聞くと、またのそりと日當りの緣へ歸つて長々とそこに寢轉んだのであつた。

彼に對する世間の人達の疑惑と迫害とが、眼につかないやうな靜けさで、徐々に進行して來た。

或者は彼をこの町の恥辱であるやうに、憎み呪つた。或者は今にも彼が放火か强盜でもする者のやうに、警戒と恐怖とで彼の行動を監視してゐた。然し大多數の人達は、彼を不具者か癈人かのやうに、輕蔑と憐憫とで噂しあつた。

『氣の毒なものだな。貧乏で根性がねぢくれたのぢや』。と一人が云つた。

『ええ、若い者がなあ、氣でも違はにやええがのう。あこ(彼家)のお母アも可哀想なもんよなあ』。と他の者が相槌をうつた。

『何のいの、もう氣は違うとるぢやろ。そんでなうて、あんな阿呆氣た者になれるもんかい』。と三人目の男が何の躊躇もなしに、かう斷定して終つた。

平吉は自分に對して吐きかけられる、かうした唾液を默つて聞き流してゐた。例の支配人の實地遭難談といふのが、××新聞に連載されてゐて、それに依ると地震後に引續いて起つた火災の裡で、あらゆる慘虐なことが敢行されたといふのであつた。そしてそれを實行した者どもは、反國家主義者と被征服民族者たる人達との一團であつたといふのであつた。支配人はその暴行の目擊談として、さま〳〵な非常識を紙上に羅列した。然しそれを讀まされた町の人達は、自分達の注文通りの記事に滿足して、その新聞とその談話者とに喝采を贈つた。

『保田の伜もやはり彼等の仲間であつたんぢやさうな』。と誰かゝ云ひ出した『俺は彼が警察へ喚ばれたのを知つとるぞ』。

『非國民ぢや』。とそれに應じて誰かゝ叫んだ。

『さうぢや、非國民、非國民――』と何時の時代にでもあるやうに、尻馬に乘つて騒ぎ立てるヲベッカ者が出て來た。

その晩、夜更けてから誰かゞ平吉の家に投石した。石は家根の上に落ちて、臺所の明り窓から家の内へ落ちこみ、ひどい音を立てた。家の者はその物音に眼を覺した。然し石はそれ一つぎりで、投石した者はすぐ逃げて行つたらしかつた。母親にはその石が何を意味してゐるか判らなかつたけれど、平吉にはその唯一つの石の意味がよく判つてゐた。

町の人間どもは俺にいよいよ挑戰して來たのだ！　ふふん、と彼は蒲團を頭から冠つて、母親が彼に何か話しかけたのにも、さも眠さうな風を見せて、返辭もせずに默つて眼を瞑つてゐた。彼は決して眠つてゐるのではなかつた。彼は自分の生活の樂園のやうに空想して來た、昔の淳朴で親切な土地の幻影が、無慘にも破壞されて行くのが忌々しかつた。自分の願つてゐた靜かな孤獨な瞑想的な生活も、これで破壞されて行くのだ。やはり自分は何處にゐても、自分の生活を裸にされてゐなければならないのだ。明日は、明後日は、そのまた次の日は……半月

後一ケ月後、そのまた次には、十個、二十個、三十個、否、無數の石が彼方からも、此方からも自分に向つて投げつけられることだらう――と考えた。

然しそんなことが、自分にとつてどれだけの問題になるのだ。自分はそれよりも、もつと自分にとつて大きな問題を解決しなければならぬ必要に迫られてゐる。といふのは、自分は自分の生命をどう持ち扱へばいいのか、といふことだ――自分の生命をどう使ひ切ればいいか、といふことだ。その解決の爲めには自分は、孤獨になつて自分を突つめて行かなければならない。孤獨と靜寂とは、今の自分にとつては絶對に必要なのだ。それに、その孤獨が壞されかけやうとしてゐる――と彼は考えた。

然し何時しかまた熟睡に落ちてゐた。

五

突然、奇怪な噂が平吉の耳に入つた。

町の有力者達がひそかに、保田平吉に對して何事かを計劃してゐるといふ話であつた。平吉はその後もずつと、母の家に泊つてゐた。さうするより他に、彼にはどこへも行く目的はなかつた。小學校へ通つてゐる彼の弟は、いろいろな世間での噂話を、毎日のやうに新しく持つて歸つた。町や村でも平吉に對して惡意を持つてゐるのは中年以上の人達で、それも大抵はもう一家の主人となつてゐる連中ばかりである。青年の多くは好意を持たないまでも、兎も角も彼に挑戰して來やうとは思つてゐない。が然しこの青年達には團結がなかつたのに反して、中年者達にはいろいろの關係から團結があつた。そして何と云つても權力を持つてゐた。それがこの頃になつて平吉に對して何事かの相談を密々で始めてゐると云ふのであつた。

彼は町を歩いても、彼方此方から澤山の人に眺められるのを感じた。村の方を散歩すれば、すぐ警察側では、百姓を煽動しに行くのではないかと疑つて、執念深く彼の行方を探索した。然し彼の自然を好む性癖と、孤獨に對する誘惑とは、そんな愚かな人間達の疑惑や妄想的恐怖のために、尻込みして終ふには餘りに强かつた。彼は足に任せて野や山を歩るき廻り、その間にも彼は絶えず思索しつづけた。彼の頭は手足が休止する時には同じく休止し、手足が活動し始めると、同じく活動を始める、彼の研究室は蒼空の下、林の中や草原の上や、河岸の柳の木の傍にあつた。そこにゐて、彼は自由に空氣を吸ひ、視線を太陽の光りのなかに露出しにし、手や脚を草や黑土に自由に任せて、思索し追求し演繹し歸納するのであつた。この自然の殿堂の裡にこそは眞の自由があり、孤獨があり靜寂がある——。だから彼は何物よりも自然を愛し理解しやうとしたのであつた。

噂はやはり實際となつて、すぐ彼の眼の前に現れた。町の連中が何事かを企んでゐるとの話を、彼が耳にした三日後の、朝九時過に彼の家は二人の正服警官と、一人の私服警官との訪問を受けた。そしてすぐ彼の荷物は調べられた。三人の者は彼の行李のなかから、數册の雜誌とその雜誌のなかに挾まれてゐた數枚のビラと手紙と手帳一册とを押收してしまつた。彼はその間、默つて彼等のすることを傍で眺めてゐた。彼の母はびつくりして、臺所の暗い隅のところに、まごまごと立つたりしたまま、行李の取調べの濟むまでそこから出て來なかつた。

『どうもお邪魔をした』。かう云つて警部補は他の二人と一緒に、彼の家を出て行つた。

するこ今度は正午近くなつて、私服の警官が訪ねて來て、檢事局の命令書を差出した。彼はそれに認印を捺して警官に返すと、連れ立つて家を出た。母は島の方にゐたので、彼は母に聲をかけて行かうかこ思つたが、一瞬間に思ひ返して、默つてそのまゝ出て行つた。

町の警察署へ着くと、彼はそのままずつと廊下を奥の方へ連れこまれて、取調べも受けずにすぐ檻房へ入れられた。

彼の入れられた檻房には誰も入つてはゐなかつた。彼は板敷の上に坐つてぼんやりと太い格子戸の間から、前の廊下や、そのすぐ突當りにある看守の溜り場を眺めた。看守はそこの机の上に帳面を擴げて、硯へ墨をすりながら、大きな聲を出して彼の姓名を訪ねた。彼も檻房の裡から大聲で、自分の住所姓名こ年齢とを怒鳴り返した。そこへ先刻の私服の警官が辨當箱を持つて來てくれた。

『まだ飯前だらう。』かう云つて、格子の間からそれを差入れてくれた。彼はそれを受取つて、

すぐ箸を取り上げた。箸を手にしながら彼は考えた。

——これは一體どうしたことなんだ。俺には何の事だか判らない。東京でもいい加減入つて來て、此處で半月こも經たないで、何の原因もなしに、またこんな所へぶち込まれるなんて、眞逆にこれは芝居ぢやあるまいな——。

彼は夢を見た——。

彼の眼の前を葬式の行列が通つて行くのであつた。誰も彼も皆一樣に、黑い喪服を着けて、默々としてまるで影畫のやうに列んで歩いて行く。長い行列の眞ん中頃に細長いまるで舟のやうな形の奇妙な棺が、黄や赤や青や樣々の彩りをした裸體の人間に擔がれて行く。見るとその人達の顏はどれを見ても、唯のつぺりとして眼も鼻も口もないやうな、そして爪の樣に蒼く腫あがつた顏をしてゐる。棺の中に寢てゐる死人は、これから墓場へ運ばれて行く者とは思へぬやうな、陽氣な樂さうな顏付をして、ぱつちり見開いた眼で空を眺めてゐる。その口から絶へず蜂のうなり聲のやうな、不思議な音が洩れ聞える。

まーまーまーまー、めーめーめーめー、ふう、ふう、ふうふうッ……

何だらう、不思議な聲だな！　何故死人があんな聲を出して呟くのだらう。ふつと彼は氣がついて、脊中から冷水を浴びせかけられたやうに思はずぶるッとして、頭の毛が戰ぐやうな氣がした。よく見ると、死人はその聲の出る調子に合せて頭を振つてゐる。可哀想にあんなに頭を振つて、今にも頭がぬけ落ちはしないか、と彼は心配しずにゐられなかつた。暗い薄闇のやうなものが、絶えず行列の周圍に動搖して、彼の顏近くまで流れて來る。そして行列は何時までで待つても、後か後からと果しなく續いた。不思議な呟聲も、それと同じやうに、何時までも聞える。それに先刻からあれだけ行列が進んで行くのに、その行列の中の棺だけは、何時までも同じ場所に留まつてゐる。それでゐて棺を擔ぐ人は、こんな厄介者は少しでも早く墓穴の中へ投げこんで、片附けて終へと云はんばかりに、まるで走るやうにして歩いてゐるのではないか。それに――ああ、自分は何を見てゐるのだらう、と彼はぞつと心が寒くなつた。

『自分は氣が狂つて來たのではあるまゐか』。

かう思はず夢の中で呟いた瞬間に、何處かで、ぐわちやんと恐ろしい音が響いた。そして、その物音で吃驚して彼が眼を開けた刹那に、眼の前に壁でも崩れかかつて來たやうに、大きな眞黑な塊が跳んで來た。そして彼の身體の上へ落ちた。

『あつ』。と思はずも彼は大聲を出した。『痛いぢやないか、馬鹿つ』。

『勘辨してくれ。俺あ突飛ばされたんだ』。と見慣れない男が彼に云つた。

『どうしたんだ』。と彼は痛さに顏を顰めながら訊ねた。

『俺あ演說してゐ所を捕つたんさ』。とこの男は得意さうに云つた。

『何の演說をしたんだ』。

『社會主義のさ』。

平吉はその男の顏を凝つと瞶めた。男は彼に瞶められて、少しきまり悪るさうに眼を伏せたが、直ぐ思ひ返したのか、ずつと顏を近寄せて來て囁くやうに

『君も社會主義で捕つてゐるんだらう』。と云つた。

『知らんよ。ふふん』。と平吉は冷笑した。

『匿さなくつたつていいやね。先刻、此處の刑事がさう云つてたよ。俺あ知つてるぞ』。

『何を知つてるんだよ』。

『仲よく仕様ぢやねえか、かうなりや仲間だからなあ』。とその男は平吉の肩に手をかけた。

『僕はまだスパイの仲間にはならない』。と彼はその肩の手を拂ひ退けた。

『誰がスパイなんだ』。とその男は見る見る氣色ばんで來た。

『君がさ』。と平吉はそれに答へた。

『この野郎つ』。とその男が叫ぶのと、平吉の鼻の先へ拳固が飛んで來るのと同時であつた。

平吉は仰向けに打倒されて、顏の眞中へ拳固を喰つた。びいんと頭の心まで泌み通るやうな痛さを感じた。そして直ぐに生溫かい血が鼻腔から流れ出て來た。平吉は直ぐ跳ね起きた。そして喚きながらその男に跳び懸つて行つた。彼はまた一つ拳をその米嚙に當てられた。同時に彼は相手の腹を蹴り上げた。

ぐわちや、ぎいつ……と檻房の扉が開いて、看守が檻房の內部に入つて來た。平吉はこれでこの無法な奴から遁れられると喜んだのであつた。

『何をしとるんぢや。この土畜生めらが――』。と警官は喚き立てた。そして不意に平吉を投げ倒して、靴のままでその頭を蹴りつけた。

彼は眼が眩んで、呼吸が窒るかと思はれた。それでも勇氣を盛り返して、彼は中腰に立上つた。その立上つた所を、今度は襟頸を引掴まれて、羽目板にたたきつけられて終つた。彼はそのまま、ぐたりとなつて檻房の隅に打倒れた。

『此奴らあ、がやがや騒ぎくさると』と警官は呼吸を切らせて『もつと半殺しのやうな眼に會はせられるぞ。暴れるなら、暴れて見い』。

その時、時計が十一時をうつた。

『お前は此方(こつち)い來い』。かう警官は云つて片方の男を檻房の外へ連れ出した。

また、ぎいつと檻房の扉が閉つて、彼は暗い中に一人で殘された。毛布一枚すらない、板敷

の上に、平吉は仰向けに寢轉がつて、冷たい闇を凝視してゐた。その闇の何處かでは、ちろ、ちろ、ちろちろ、ちろ……ここの秋の寒さのなかに生殘つたらしい蟀が、自分だけの世界のうに啼き續けてゐる。

ちろちろちろ。ちろ、ちろ……（大正十三年一月）

ス　パ　イ

一

巡査平山文藏が自分の受持區域の巡囘を終つて、駐在所へ歸つて來ると、妻のお咲が待ちかねてゐたやうに、彼の靴音を聞きつけて障子を開けるなり、すぐかう云つた。

『先刻、署長さんから電話がありまして、歸つたらすぐ出署してくれと申して來ました』。

『要件の話は別になかつたか』。と文藏は慌てて訊ねかへした。

『はい、別に何にも……』とお咲は答へたが、文藏はそれを終まで聞かずに、まだ押冠せるやうにかう訊ねた。

『そして時間は何時ごろだ』。

『お晝過ぎでしたか。もう一時に近かつたかも知れません』。お咲は夫の文藏が慌ててゐるのが

少し心配になつた。

『それでは行つて來やう』。かう云つて彼は帽子を冠りなほして、裏口の方へ廻つたが、其處から大きな聲で妻に訊ねた。

『子供等は何處へ行つたんぢや。また遊びほうけごるに違ひない。お前が少しやかましく云ふて勉强させんといかん。遊び癖がついて困つたもんぢやのう』。文藏はかう大聲で喚いた。『はい』。と奥の方でお咲の聲がした。

『それからの』。と文藏はまた喚くやうに云つた『晩酌の酒がもう無いぢやろ。美佐子が歸つたら買はせてをいてくれ』。

文藏はかう云ひながら、裏口から自轉車を引き出して、駐在所の表へ出て來た。そしてガラス戸の際から、奥の方で縫物をしてゐる妻の方を覗きこんで

『俺は行つて來るから、酒を忘れんやうに買はせといてくれ。またこの間のやうに忘れるなよ』。かう念を押した。

『お酒は美佐子が學校から歸つたら買はせにやります。忘れはしません』。かうお咲は笑ひながら答へた。

文藏は妻のこの返答を聞いて、安心したやうな顏をして、自轉車に乘つて出かけた。この村の駐在所から、本署の所在地の町までは一里半程の道程があつた。道は國道筋で、眼をつぶつてゐても自然と行かれる程な、廣い一筋道ではあつたが、村から町までの間には人家は一軒もなく、道は山裾に沿つて田圃の間を縫ふやうにして町へ續いてゐた。村を出るとすぐ、見上げるやうに聳え立つてゐる松の並木が、街道の兩側に二丁餘りも續く。十一月初めの爽かな風が、熱しきつた稻の香りを漂はせて來た。文藏は松並木の間を、自轉車を走らせてゐた。そして並木街道を拔けきつた時に、左の方遙かの線路を汽車が走つてゐるのを見た。玩具のやうな汽車が線路の上を滑つて行く響が、靜かな山峽に反響して、それがまるでくすぐるやうに文藏の耳を撫でた。

『もう四時だなあ』。と彼は汽車の姿を眺めながら思つた『すると署へ着くのは四時半か。署長

さんがゐればいいが』。

文藏は今日突然に本署からの呼出しが、不審でならなかつた。毎月の出署日以外に、今までこんな突然の呼出しを受けたことは、彼には廿年近い勤務の間に一度もないことであつた。特に文藏は模範巡査と云はれて、「精勵格勤」と云ふ定評があり、その頑固で正直な點では、署長も少し煙たく思つてゐる位であつた。職務の落度と云つては何一つない筈であるが……然し若しかしたら、と文藏は思ひ當らないこともないではない。それは四五日前に、鶏を往來へ放し飼ひにして置いた者を、道路法違反で文藏が告發した。するとその翌日の新聞に何者かの投書で、文藏が規則を楯にして杓子定規な取締をする、過酷な巡査だと彼を攻擊した記事が出た。餘り取締を嚴しくするな、多少の手心は加へて——とは何時の出署日にも、文藏が署長から注意されることであつた。それ程文藏は神經質的に取締規則に拘泥した。彼の潔癖性は、何事に就ても規則通りに村中を取締らなければ、安心して眠れないのであつた。署長は他の部下に對しては、もつと取締を嚴重にして官紀を肅正せよ、と云ふ場合にも、彼だけには、少し取締を

緩やかにして適宜の處置をとつたらどうか……とそつと訓諭するのであつた。だから今日の呼出しは、例の新聞記事に就てではなからうかと考えた。

『やはり新聞にあつた通り、自分は少し過酷だつたのではなからうか。署長さんも、同じやうにさう考えたのぢやないかな……だけど自分は正しい筈だ、規則どほりのことをやつたんだからな。もし、それを告發して悪いのなら、そんな規則をつくらなけにやよい——』。かう獨言を呟きながら、それでも心の中は不安であつた。

どんなことが先方に待ち受けてゐるのだらう。どんな事件が起つてゐるのだらう、殊によると自分だけでなく、郡下全部の者が召集せられてゐるのかも知れない。それでは、もしかすると警察部長の巡視かな。そんな筈はない、もしそれなら前から内々の噂位はある筈だ……文藏にはまるで見當がつかないだけに、また自分の職務上のことを念入りに反省して見ても、どこに一つ落度もないだけに、彼の心は不安と焦燥に驅り立てられた。黄色く實のつて、黄金色の波をうつ稻田も、その田の果てにこんもりと盛り上つた松茸山も、その山の上の空高くを泳

ぐやうに悠々と流れて行く秋の白雲も、それらの景色の中の添物のやうに、田圃の中から彼を見て挨拶の聲をかける馴染の百姓達も、今の彼の眼や心には、自分の行く途の邪魔をする厄介物のやうにしか思はれなかつた。

『あい、よいお天氣で――平山さん、何處さ行かつしやるだよ』。と百姓達は聲をかけた。

『本署へさ。少し急ぎの要事でなあ』。文藏は浮(うは)の空でかう答へては、ペタルを蹈んでゐた。

駐在所から一里程も來ると、道は田圃の中を離れて山懷に入つて、其處に小さな河が流れてゐる。文藏はその河に架けた橋の上へ來て、自轉車に跨つたまま橋の欄干に凭りかかつた。そして白い泡を立てて流れる水の面をじつと瞶めながら、暗い心持になつて考えこんだ。こんな事になるなら、あの時に叱責しただけで、告發することを止めて置けばよかつたと思つた。平素から「署長さん」も自分の短氣と馬鹿正直は、賞めながらも注意をしてくれてゐたのに、つい前後の考えもなく其時の腹立紛れでやつて終つたのだ。俺(わし)はやはり他人の言ふ通り、馬鹿正直なからだ……文藏は襟のボタンをはづして、熱しきつた身體に涼しい秋風を入れた。そして額や鼻の先の汗をハンカチで拭いて、また獨言を呟いた。

『さうだ、それに相違ない。鷄の一件より他には最近に俺の管内で、何も事件はなかつたんだから――』。

かう思ひ決めて終ふと、文藏は頭の中で勝手に一匹の鷄の姿を描いて見た。それが羽搏きをしながら大聲で鬨をつくつた。そして羽搏きするたびに鷄は大きくなつて行くやうであつた。見る間にその鷄は、牛のやうな大きさにまでなつた。文藏は實際眼前にそんな奇怪な鷄を見てゐるやうな氣がした。彼は忌々しい氣になつて、自轉車の上に身體を据えなほすと、今度は何も考えずに、廿分程後には本署の門前に自轉車を乘りつけた。

二

彼が署長室へ入つて行くと、署長は平素のやうに機嫌よく彼を迎へた。文藏は署長の顏が平素よりなほ機嫌よく見えるので、また不思議な氣がした。鷄の一件で態々自分を呼び寄せて叱

責するのなら、こんなに機嫌よくにこにこして自分を見る筈がない、これはどうしたことだらう、と正直な文藏はどぎまぎした。そして尙更ら身體を固くして終つて、恐る恐る署長の机の前へ行つて、兩眼に敬意を充分に籠めて頭を下げた。

『平山君か――忙しいところをごうも濟まなかつた』。かう云つて、まだ年の若い署長は机の上の書類を、そのまま傍へ押しやつた。

『時に君の管內で松本と云ふ家はあるかね』。と署長は續けてまたかう訊ねた。

『はッ』。と云つたきりで文藏には後の文句が續かなかつた。松本と云ふ家は彼の記臆のなかにはなかつた。

『貸家を持つてゐる位の家なんぢやから、相當村でも資產家ぢやろと思ふが――知らんかね』。

『×村で――』。と文藏はますます固くなつて訊ねかへした。

『さう、×村の××區ぢやとか云ふが』。かう云つて署長は突然卓上のベルを鳴らした。

『警部補を呼んでくれ』。署長は顏を出した小使にかう云つた。そして文藏の方を見て『××區ぢやと思ふが、警部補から詳しい番地を訊いてくれ給へ』。

『お呼びになりましたか』。かう云つて、すぐ警部補が署長室へ顏を出した。

『うむ。例の松本とかつて云ふのは、あれは何處ぢやつたかね』。と署長は警部補の島田に視線をそそいだ。

『あれは×村××區の呉服屋ださうです』。島田は明快な東京辯でかう答へた。

『呉服屋ぢやさうだ。×村の呉服屋と云へばさう何軒もある筈がないから、すぐ判るぢやろう。それはどう云ふ家かね』。

『呉服屋の松本と云ふのでありますか』。と文藏は軍隊を出てから、もう廿年近くなるのに彼にはどうしても、軍隊の語がぬけきれなかつた。

『うむ。あるかねえ』。と署長は薄い鬚を指先で撫でながら、椅子の上で身體を反らした。

『はッ、松木といふ呉服屋はありますが、松本と云ふのは管內には無いやうに思ひます。×村で呉服屋と云ふのは松木一軒だけであります。』文藏はかう答へて、署長と警部補の顏を半々に

眺めた。

『松木！　うむ。そこは何かね、貸家を持つてゐる家かね』。と署長は訊ねた。

『はツ、小さな家ですが。二年ばかり明家になつて居ります。今では納屋がはりに使つてゐるやうであります』。文藏はますます解されない謎を、眼前に突出されたやうな氣持で、兎も角も自分の知つてゐることだけを答へた。

署長も警部補も暫らく默つたまま、文藏がなほ何か云ひ出すのを待つてゐるやうに見えた。で、文藏は署長の顏色をうかがひながら

『その松木の貸家に就きまして、何か事件でもあるのでありますか』。と訊ね返した。

『ふうつ』。と署長は息を吐きながら、卓上の書類の中から、一枚の紙を取出して

『どうかね、近頃その松木の貸家を誰か借りるやうな噂でもないぢやろうかね』。

『さう云ふ話も聞かんやうでありますが――』。と文藏は答へたが、何のために態々呼び出されて、貸家の詮義をされるのか、彼には不審でならなかつた。彼はをづをづと署長や警部補の前に立つて、今にも思ひ懸けぬことで「油を絞られる」のではないかと心配してゐた。

『今度は面倒なことを依頼しなけりやならんのぢやが――』。かう云つて署長が彼に打開けた事件の內容は、彼にとつてはまるで「寢耳に水」のやうな話であつた。

今度、×村に社會主義者が三四人來る、そして松木の貸家を借りるらしい。借人の名義は×町の某會社員であるけれど、實際來て住む人間は主義者らしい――と××町署から通牒があつたから、早速その事實を取調べて相當警戒をしなけりやならん。若し出來るなら約束を破談にさすやうな方法はないものだらうか、と云ふやうな署長の內談であつた。

文藏にとつては、今日まではまるで別世界の人間のやうであつた社會主義者と呼ぶ連中が、突然自分の管轄の村に住むなぞとは思ひも懸けぬ珍事であつた。彼は鷄以上に大敵が、自分の眼前に出現したことを感じた。逆賊、賣國奴、放火、盜人と同樣な人間と考えてゐる主義者が、しかも三人まで來て、自分の駐在所のすぐ眼の前に住むのだ。そして自分はこれから其奴等と戰はなけりやならんのだ。今日まで平和であつて、陸でこそ何とか自分の惡口をこそこそ噂す

る者はあつても、正面から自分に喧嘩を賣るやうな者もなく、平穩無事に過して來た×村の八年間の勤務も、明日からは主義者達のために破られるのだ。然し自分は職務のために、村の平和のために、社會主義なんていふ惡魔化道と戰はなけりやならん――こんな考えが文藏の頭の中をぐるぐる廻りした。彼の痞せた顏は常よりも引締つて、なほ更ら痞せたやうに見えた。何時でもじつと物象を瞶めてゐるやうな瞳は、微動だもせずに署長の顏の眞中を瞶めてゐた。

『平山君』。と警部補の島田が云つた『いづれ近日中に、僕も一度視察に行くがね。今日歸つたら早速、松木の方を調べて見たらどうかね。そしてまだ約束が出來て居らんやうなら、それとなく松木に匂はして、斷らしたらどうかね』。

『實際、あんなものが來ると面倒ぢやからね。今日の時勢ぢやから、取締らずに放任して置くわけにも行かず、と云つて罪人扱ひにして終ふわけにも行かないし。まあ何とかして放逐策を講ずるのが利巧ぢやの』。と署長もかう云つて笑つた。

『は……』。と文藏もかう云つて笑つたけれど、心の中では同じやうに「これは困つたことになつた」とつくづく思つた。

五時半に本署の門を出て來た文藏は、先刻と同じ道を自分の村の方へと、自轉車を走らせてゐた。

三

「釣瓶落しに暮れる」と昔から云はれる秋の陽は、駐在所へ歸る途の半で、もう薄暗くなりかけて來た。道が山懷を離れて、田圃の中へ出た頃には、すつかり夜になつて終つた。新月の淡い光りが、うすぼんやりと闇を照してゐた。冬の來ることの早いこの土地では、虫の聲が細々と素枯れて、夜風に搖れ合ふ稻葉が、さやさやと道の兩側に囁いてゐた。闇の中に道が一筋白く、川のやうに眞直ぐに流れてゐる。その道を文藏は傍目もせずに自轉車を走らせた。文藏の頭は社會主義者に對する取締のことで緊張してゐた。それはちやうど彼が日露戰役の時に召集せられて、戰地へ向けて出發した時の心持に似た、緊張と感激とであつた。警察界へ入つて以來

ほとんど事件らしい事件に直接にぶつつからなかつた彼は、今度こそは社會主義者をぎゆうツと取締つて、彼等に「泡を吹かせて」やろうに決心した。署長は「罪人扱ひ」にも出來ないと云つたけれど、彼等は明白に法律にこそ觸れないかも知れぬが、然し何と云つても國賊だ――文藏は自轉車を走らせながら、こんな風に考えた。晝間來る時に、この同じ道を自轉車を走らせながら、自分の取締の過酷なことを後悔したことはもう忘れてゐた。

文藏が駐在所へ歸り着いたのはもう七時に近かつた。妻のお咲はまだ勝手の方で働いてゐた。子供達は長女の美佐子を始め三人が、奥の間の食卓の週圍で騷ぎ廻つてゐた。そこへ文藏が劍をがちやつかせ、眼をぎよろぎよろさせながら入つて來た。そして美佐子の顏を見ると同時に彼は晩酌のことを思ひ出した。

『おい、今歸つたぞ。酒は買ふてをいたか』。と彼は勝手許にゐる妻へ聲をかけた。

『買ふてありますよ』。とお咲が暗いところから彼に答へた。『御用つて何でした。また署長さんのお吐言(ここと)やあらしまへんのか』。

『阿呆云へ。社――。』と云ひかけて、子供達のゐたのに氣づいて『まあ、あとで話してやる。美佐子、その德利をここへ持つて來い。』と云ひ紛らした。

十六燭の明るい電燈が、まづしい食卓の上を照してゐた。空腹に染みこむ酒の香りは、疲れた文藏の神經を刺戟して、彼を苛々させた。藥鑵に漬けた德利の口から、淡い湯氣の立上り初めたのを瞶めながら、樂しさうに彼は舌なめずりをして、今年四歲になる女の子を膝の上で搖ぶつてゐた。彼の頭からは社會主義の影が薄らぎかけてゐた。

『まあ貴方、御飯をあがるのなら、衣服を着かへてからになさればええのに。』と、そこへ濡手を拭きながら出て來た、妻君は彼の姿を見るとかう云つた。

『いやこれでええ。俺はまだ外出する要事があるんぢや。』文藏はかう云つて、膝の上の子供をあやしながら、眼を細くして德利の口を眺めてゐた。

『さうですか。』と云つたお咲は、今度は子供達を見て『さあ、それでは御飯にしやう。勝ちやんは此方へお出で。』と文藏の膝の上から子供を抱きとつて、食卓の前に座つた。

四

晩酌一合、飯四杯――それですつかり滿腹のいい氣持で、文藏は夜の八時頃に官服の巡回姿で、村の郵便局へ入つて行つた。郵便局ではちやうど事務を了つたばかりで、店を暗くして戸を閉めやうとしてゐた。局長代理の男がガラス戸に幕を引かうとしてゐるところへ、文藏は『今晩は』と云つて首をぬつと出した。局長代理の男は、暗闇から不意に聲かけられたので、ぎよつとして幕から手を放して彼の方を瞶めた。文藏はがちやりがちやりと劍を鳴らして

『俺ぢや――平山ぢや。もうお休みですか』。と云ひながら、幕を除けて局の内へ入つて行つた。

『あ――平山さん。』と郵便局の事務員はびつくりした。『今頃どうしなさつたんやな、そんな姿で。』彼の泥色した顏の皮膚が、瞬間びくりと緊張したが、すぐ惡狡い微笑を厚い唇に浮べた。

『一寸、内密で要事ができたのぢや。本署の内命で來たのぢやから、それでこの姿で來た。』と文藏は眞面目な顏で笑ひもせずに云つた。

事務員の橋本の顏からは、急に脅えのために今までの惡狡い微笑は消えて終つた。そして黄色く濁つた愚鈍さうな瞳をきよろつかせて、薄く開けた唇の隙間からは、ふうツふうツといふ溜息のやうな聲が洩れた。彼は兩手をだらりと下げたまま、白痴のやうな姿で文藏の前に突立つてゐた。電燈に照し出された顏の半面の、鼻の横に大きな黑子が一つ飛び出てゐるのが、まるでダニでも喰ひ下がつてゐるやうに醜かつた。

『どうか此方へ。』と暫らくしてから橋本は漸く云つた。『皆、歸つて終ふて誰も居りまへん。奥には妻が居りますが――。』

『否、奥さんにも内密にして貰はんと困る。』と文藏は小さな聲で云つた。

『どんな御用か知りまへんが――。』と橋本は入口のガラス戸に幕を引いて終ふと、文藏の顏を振向いて眺めながら『かうして終へば戸外からは見えまへんし、それに時間過ぎやで、もう誰も來る者はあらしまへん。此處の方がようごすやろ。』かう云つて自分が先に立つて、卓子の前の椅子の一つに腰かけた。

文藏は靴を脱いで上ると、帽子と帶劍とをとつてそれを傍の椅子の上に置き、橋本と對ひ合つて椅子に腰かけた。

『話と云ふのは、一つ賴まれて欲しいんぢやが』。文藏はかう云つて、じつと相手の顏を眺めながら、ごくりと唾液を呑みこんだ。

『へえ』と橋本は不審さうな返答をして、文藏が何を云ひ出すかと待つやうに、彼の口許を眼瞬もせずに瞶めた。

『いや厄介なことができての』。と文藏は例の社會主義者のことを、すらすらと橋本に話して聞かせた。そして『松木とあんたとは親類同樣の仲ぢやし、あんたから松木に話して家を主義者に貸さんやうに運動して貰へまるかのう』。と云つた。

『松木の家へ主義者が來るんですか』。と橋本はびつくりしながらも、非常に好奇心を動かされた『へえ——何といふ奴ですかの。その主義者は——』。

『ごうぢや、引受けてくれるか』。と文藏は橋本の返答を促した。

『そりやまあ、云ふだけは云ふても見ます。けれど松木とは親類といふ仲でもありまへんで、あれが何と云ふか、借人が社會主義者ぢやと云ふ話だけはしましよ』。と橋本は義理で引受けるやうな返答をした。

『賴むわい。俺をひとつ助けると思ふてなあ』。と文藏は苦笑しながら『いやはやどうも、厄介な者が舞ひ込んで來よつた』。かう云つて彼は皮の厚い掌で、頭を撫で廻した。

『それで主義者が來たら、警察ではどうしますのや』。と橋本は暫らくしてから訊ねた。ぱくぱく唇を動かす度に、ダニのやうな黑子が、顏面筋肉と一緒に生物のやうに動く。

『さあ、實は賴みといふのは、そこなんぢやが——』。文藏は急に煙管を手から離して、椅子と一緒に橋本の方へ膝を乘り出した。

『實は今日その事で本署へ行つて來たんぢや。ところが署長さんは俺に今後は、主義者達の毎日の行動を視察報告してくれとの命令ぢやけれど、俺だけではどうかと思つての。署長さんとも內密で打合せたのぢやが、あんたにも手傳つて貰ひたいんぢや』

『何の手傳ひをするんかの』。と橋本は鼻の下を親指の腹でこすつた。

『主義者が來たら、松木の方の傳手で彼奴等と知合ひになつて、いろんなことを搜ぐつて貰ひたいんぢやが――これは署長さんの希望なんぢや』。と文藏は口調に熱を籠めて說き立てた『彼奴等は國賊ぢやないか。今度の關東地方の地震にでも、放火をしたり盜みをしたのは皆あの主義者や鮮人達ぢやないか』。

『そりや俺も新聞で見ました』。

『なあひとつ賴む。承知してくれや。仕事の出來榮えで褒美の金を出す、と署長さんも話して居られるんぢやから、引受けても損はせん筈ぢや――郵便の出入れだけでも調べて知らせてくれんかのう』。

二人が話してゐる頭の上では、時計が規則正しく鳴つてゐた。火鉢を挾んで對合つてひそひそと密談してゐる、二人の男の影法師が室の扉の上に、二つの妖怪が相互に覗きこんでゐるやうに映つてゐた。しんと更け靜つて何處にも物の響はなかつた。前の往來にも人足が絕えて、二人は洪水の退き跡に取殘されたやうな氣がした。奥の室にゐる橋本の妻も、何をしてゐるのか、ことりとも音を立てないでゐる。秋の夜の靜けさが、水のやうに冷たく人の心に浸みて行く夜である――暫らくして文藏がまた繰返へした。

『それでは賴む。橋本君承知してくれ』。

『へえ――』。と橋本は忙んやり答へた。

『松木に明日の朝、君から話して見てくれや』。

『へえ――』。

『本署へも、さう返答して置くからの。萬事うまく賴む』。

『へえ――』。と答へながら、局長代理の橋本事務員は、これで月五圓でも十圓でも臨時の金が入れば、自分の生活も少しは樂になる。郵便局の事務の際に、鷄の糞塗れになつて、玉子を產ませてゐたところで、一個月に何程の金にもなるものではない――と考えてゐた。

『賴む、賴む、』。と拜みたほしにして、文藏は帽子を冠り劍を腰に吊下げて、人目を忍ぶやう

にそつと戸外へ出た。『それでは間違ひなく遣つてくれよ』。と念を押してから、急に眞面目な顏になつて、帽子に右手をあげて禮をした。橋本もにやりとしながら、默つて輕るく頭を下げた。

大無間山の中腹から上には、白く夜霧がかかつてゐた。麓の森を越して來る夜氣は、額が濡れるかと思ふ程に、冷たく霧を含んでゐた。村は大地にしがみついたやうに、薄闇の底に横つてゐて、國道の往來だけがずつと闇の中に伸びてゐた。文藏は襟頸が水の觸れたやうに冷たかつた。道の片側に立止まつて小便をしながら、思はずぶるつと身慄ひして大空を仰ぐと、星明りのする夜空は、打水をしたやうに高く遠く澄んでゐる。この時、不意に彼の頭の上で、布を引裂くやうな消魂しい聲がするので、ぴつくりしてよく聞くと、それは空を飛んでゐる五位鷺の啼音であつた。森の方角へ飛ぶその姿が、通り魔のやうに仄暗く中空を流れて行つた。

五

それから三日の後に、たうたう松木の貸家へ三人の青年が移つて來た。それを聞くとすぐ、郵便局の事務員橋本は、何氣ない風でその家の前を、二三遍も素通りしながら、家内の様子をそつと覗いて見た。然し何も判らなかつた。入口の障子はぴたりと閉めきつてあつて、戸口にイんでゐるだけでは、人の話聲が微かに聞えるだけで、それもどんな話やら内容はまるで知れなかつた。彼は近所の子守達をつかまへて、それとなく様子を搜ぐつてみたけれど、村の子守達も『俺等(わしら)そんなこと知らんぞ』と答へるだけで、何一つ報告するやうな材料も掴めなかつた。

彼はその家を離れて、ぶらぶらと街道を歩いて行くと、巡査の平山文藏に出會はした。

『來ましたなあ』。と橋本は酸つぱいやうな笑を微かに浮べて、囁くやうに云つた。

『うん。それで俺は一寸訪ねて來やうと思つて』。文藏もかう答へて、何といふことなしに、同じやうににやりと笑つた。

二人はまたその家の前まで來た。そして橋本は垣根のところに立止つて、文藏だけがその家の障子に手をかけて『御免』と訪れた。家の内からは誰の返辭もなかつたので、文藏は今度は『平山です、御免下さい』と、かう聲かけて障子を引開けた。すると意外にもすぐ眼の前の上

り口の板の上に、一人の青年が腰かけて、兩脚をぶらぶら動かしながら、じつと此方を眺めてゐた。そして文藏が障子の隙間から顔を出すのを待つてゐたやうに

『平山つてな、誰だい』と質問した。

『これは――お出でしたか』。かう文藏は慌てながら『私はこの村の駐在所の者です』。かう云ひ足して家の内へ入つた、そして彼は態と戸外にゐる橋本に、家内の樣子が判るやうにと、障子を廣く開け放して置いた。

『はあ――』。と青年はじろじろと文藏の顏を見ながら、やはり兩脚をぶらつかせてゐた。

『何日此方へお出でになりましたか』と文藏は訊ねた。そして、そつとポケットから手帖を取出した。

『此方つて云ふと、この村のことですか。それともこの縣下のことですか』。と青年は訊ね返した。

『この家へです』。と文藏は心の中で「俺を馬鹿にしてくさるな」と思ひながら、鉛筆の頭を嘗めて手帳を擴げた。

『君の方で知つてる通り、今朝ですよ』。

『ふ、ふ』。と文藏は鼻の先で返辭しながら「此奴はいよいよ官憲を嘲弄してる」。かう思つてむかむかと腹が立つて來た。「よし、それでは遠慮をせずに、びしびし訊ねてやれ」。かういふ氣になつて。彼は次から次へ、追ひ捲くるやうに質問を出した。青年は大抵な質問には、素直に答へてくれた。然し最後になつて文藏がかう云つた。

『いま三人でゐられるさうぢやが、その人達の姓名や原籍、年齢はどうでせうか』。

『それは當人に聞きたまへ』。と青年は云つた。

『お出ですかな』。

『居らんよ』。と青年は突放すやうに答へた。

『あんたでは判らんかね』。と文藏は訊ねた。

『判らんな』。

『姓名も』。と文藏は意地になつて訊ねた。
『判らん』。と青年も意地悪るく云ひ返した。
文藏は怒り聲が、咽喉佛のところまでこみ上げて來るのを、ぐつと呑みこんだ。そして一層聲を柔らげて
『それでは、平素何と云つてお呼びになりますか。手紙なんか出される時には……』。
『さあ、手紙は出したことがないしねえ。呼ぶ時には、オイッ貴樣つて呼ぶんだ』。
『オイッですか』。
『さう。すると先方も返辭する』。かう云つて青年は兩頰に冷笑を浮べた。
文藏はそれを見ると、忌々しくてもう我慢にも此處に居れぬ氣がした。「今に見ろ、その面の皮を引剝いでやる。そしてこの村からたたき出してやる」かう思つて文藏は
『それではお二人が歸られたら、お知らせを願ひます。また來ますから』。かう云つて文藏は障子の外へ出た。すると急に上り口に立上つた青年は

『それではね、二人が歸つて來たら僕から聞いて置いて、明日でも屆けてあげますよ。態々來るにも及ばんでせう』。とかう云つた。
『さうして貰へば結構ですが――』と文藏は振返つて見ると、青年は自分の後姿を嘲笑つてゐたので、またむらむらと肝癪を起して『いやまた自分で來ます。一度お目に懸らなくてはならんのぢやから』。かう云つて、彼はさつさその家から出て行つた。
橋本は何時の間にか郵便局へ歸つて終つて、垣根のところには子守が一人、日向ぼつこをしてゐた。文藏は駐在所へ歸つて、先刻の手帳の續きにかう書きつけた。――顏面蒼黑、面長、鼻梁隆、眼窪み鋭し、塗黑の上鬚を有す、年齡廿六歳。
橋本は文藏と別れて郵便局へ歸つた。暫らくすると、見慣れない青年が郵便局へ入つて來た。
『切手を五枚くれ給へ』。かう齒切れのいい東京辯で云つて、五十錢銀貨をほり出した。
『何錢のを――三錢ですか』。かう橋本は云つて、その青年を見ない風をしながら、鋭く注視した。

『あ、三錢だ』。青年はかう答へた。そして獅子頭のやうに振り亂れた長髪を、片手の指でぐいとこき上げた。

『此奴だ、此奴だ』。と橋本は心の中で思ひながら、態とゆつくり勘定してゐた。そして、どんな風にこの男に話しかけて、彼等の家へ出入りする機會をつくらうかと思案してゐた。然しい智惠も浮ばぬうちに、釣錢は出來て終つたので、彼は仕方なく

『へえ』。と云つて切手五枚と釣錢とを、青年に渡した。

青年は默つてそれを受取ると、懷から出した封筒の表に、無雜作に切手を貼りつけて、五つの手紙を郵便受函のなかに投げこんで、振り返りもせずに出て行つた。橋本は暫らくその青年の後姿を眺めてゐたが、その姿が見えなくなると、急ににたにた薄氣味惡るい笑ひを洩しながら、郵便函の蓋を開けて、そつと心覺えして置いた封筒を取出した。そして自分の机の上へ持ち歸つて、念入りにその手紙の宛名先や差出人の姓名を、紙の端に書きつけて、それを抽出しに入れた。五つの手紙はそのまま、また郵便函の内へ滑りこませてしまつた。

正午の休みの時に、彼は××警察署へ電話をかけて、警部補の島田を呼び出して報告をした。その日は終日、彼はにこにこと笑ひ續けてゐた。そして、其晩遊びに來た酒屋の息子を煽動して、近いうちに彼等の家へ「社會主義の話」を聽きに來たと云つて、押し懸けて行けと說き伏せた。彼は多分の晩酌に醉つて上機嫌で喋りながら、ダニのやうな黑子の上を爪で引搔いてゐた。

平山巡査からもその夜第一回の報告が行つた。その同じ夜、××署長は寢床の中に入つてからまでも、いろいろと劃策を廻ぐらした。彼の頭には、まづ第一に×村の有志を說いて、松木の貸家から彼等を追ひ立てるやうに、家主の松木に强談さすこと、次には郵便局の橋本のやうな人間を囮に使つて、主義者達の仲間入りをさすこと……これで巧く獲物が懸らなければ、また其時の方策もあるだらう――こんな事を考えながら、彼は氣持よく其夜は熟睡した。

署長は自分の劃策に滿足して熟睡しかけやうとし、ダニの橋本は晩酌に醉つて、この月末の賞與は五圓か十圓かと空想してゐる時刻に、「精勵格勤」な平山巡査は、そつと彼等の家の裏庭

に忍び込んで、雨戸の隙間に眼を押しつけて、家内の動靜を窺つてゐた。正直な平山文藏は、今日正面から彼等の住居を訪ねて、何か報告の材料を獲やうと焦つたが、反對に留守居の青年に翻弄せられて追ひ歸されたので、散々智惠を絞つた揚句に夜更けて忍び込んで來たのであつた。文藏は盜人のやうに憎んでゐる主義者の動靜を知りたさに、自分がまづ盜人同樣に、他人の家へ忍び込んで來た。そしてこの事は自分の職務柄當然なことで、少しも耻づべきことではないと彼は思ひこんでゐた。ちやうど橋本が郵便局員の位置を利用して、他人の手紙を調べるのと同じやうに——。

秋の夜は靜かであつた。その靜かな夜更けの闇のなかを、風に吹き落される枯葉が雨のやうな音を立てて、地上を轉がり廻つた、枯葉の吹き溜つた軒下に彳んで、文藏は身體全體を耳にしたやうな氣で、家内の人間の話聲に神經を緊張させてゐた。

それから文藏の神經は日を追ふて過敏になつた。本署からは午前の十一時頃になると、きまつて電話がかかつて來た。そして島田の聲で『どうだ、今日はいい獲物はないか』と尋ねるの

であつた。文藏はそれに對して、毎日『は、何もありません』と報告するのが苦痛であつた。こは云つても、實際に彼等が何もしないのに、故意に事件をこさへて報告することも出來ず、三日に一度か五日に一度位は何とか報告する材料もこさへねばならぬので、彼は今迄のやうに樂々と呑氣にしてゐることが出來なかつた、彼は巡回の度に、村の人達から、彼等に關するこんな零細なことでも聽き集めて、それを報告しやうと決心した。それと競爭でもするやうに、橋本はまた村の青年達を煽動して、彼等に近づかさうとした。

橋本のこの計劃は、間もなく實際となつて現れた。

村の祭禮の夜、酒屋の息子が彼等の家へ訪ねて行つた。その息子は默つて障子を開けて上り口の薄暗がりのところに突立つて

『今晩は——今晩は——』と喚いた。

『おい』とすぐ答へて、誰かが障子を開けて彼の前へ出て來た。その男は脊のひよろりと高い大男で、奥で何をしてゐたのか、頭に鉢卷を締めてゐた。

『君は誰だ』。と不審さうにその男は訊ねた。
『本はありませんか』。酒屋の息子は、その男の大きな圖體に氣を呑まれて、道々考えて來た思案は何處かへ飛んで終つて、自分でも思ひもよらぬことを喋つた。
『本？——何の本だ』。
『雜誌です』。
『何だ、そんなものは無い。君は一體、何處の人間だ』。
『この村です』。かう云ひながら、彼は奥の方をきよろきよろと覗きこんだ。
『村だけでは判らんよ。村の何といふ者だね』。と脊高男は、彼の顏をよく見やうとするやうに一足進み出て顏を覗いた。
『つい近所ですが——また來ます。さいなら』。かう云ふと彼は夢中で戸外へ走り出た。彼には薄暗がりのなかに、電燈を背にしてぬつと突立つた大男が、放火か强盜のやうに思はれた。自

分が間諜になつて、此家へやつて來たのを彼等は知つてゐて、不意に自分を毆ぐりつけるか足蹴にするかのやうに思はれた。
この話を聞いた郵便局の橋本は、或日たうたう我慢がしきれず、に自分で彼等の家を訪ねた。最初の日には三人とも不在であつた。その次にも會へなかつた。彼の夢みてゐる十圓の賞與はなかなか掌の中に落ちて來さうにもなかつた。彼は苛々しながらも、絶えず郵便物や彼等の家へ出入りする人間に注意してゐた。彼等の家は郵便局から十間程しか離れないで、その向側にあつたから、監視するには左程の苦勞もゐらなかつた。
たうたう郵便局長代理は素張らしい事件の緒口を嗅ぎつけた。十二月九日の朝のことであつた。彼は嬉しさの餘り、思はず椅子から腰を浮かせて立上つた。

六

その日××警察署長は出勤すると、すぐ島田警部補が署長室へ入つて來た。そしてかう云つ

た。

『今朝、郵便局の橋本から電話で報告がありまして、×村附近の青年十名餘りが秘密出版物の配布を受けた形跡があると云ふことであります』。島田はかう云つて署長の顏を瞶めた。

『その青年の姓名は判つちよるのかね』。と署長は卓子の上に半身を乘り出した。

『全部は判然しませんが、平山にさう云つて調べさせて居りますから、正午過には報告があるだらうと思ひます』。

『それでは判り次第に其者等は引張つて來るとして、準備だけはして置いて貰はうかの。然し橋本はどうして、それを嗅ぎ出したぢやろうか』。と署長は委しいことを知りたさうに、島田の言葉を促した。

『橋本は今朝到着した郵便物を整理してゐる裡に、密封した細長い卷物のやうな郵便物があつたさうです。差出人を見るこ×村の青年で、自分もよく知つてゐる男なのださうです。それが何といふことなく、橋本の注意をひいたのだと彼奴は申しましたが、暫らく思案した末に、橋本の奴、たうたうその封書を破つたのださうです』。と島田が云つた。

『亂暴なことをしたもんぢやの』。と署長も少しびつくりした『何故またそんなことをしたのか。後始末に困りやせんか』。

『彼奴は少し馬鹿の癖に慾張屋だから、何か嗅ぎ出して褒美でも貰ふつもりでせうな。ハハハハ……』。

『ハハハ……少し此方の煽てが利きすぎたやうぢやのう』。と署長も笑つた。

『封を破つて見ると、果して謄寫版刷りの印刷物だつたさうです。それから今度は手紙の方を捜して、また同人から差出した手紙を發見けたさうで、それも開封して終つたさうです。それで大體のことが判つて、此方へすぐ電話をかけて寄越したのださうですが、薄馬鹿の彼奴にしちや大出來ですな。ハハハ……』。

『ハハハ……』。署長もこの話を聞いて笑つた。

暫らくしてから署長は急に笑ひを顏から引込めて、警部補の島田にかう云つた。

『今日の夕方かそれとも、明早朝には一網打盡にその十名を引張つて調べるとしやう。まだ充分の証據が擧つて居らんのだから、主義者の方は後でもよいぢやろう。それからその手紙と印刷物は、當署へ廻すやうに――』。

『そのことも、平山にさう命令して置きましたから、午後本署へ出頭する時に持參するだらうと思ひます』。と島田も笑ひを止めて答へた。

『いや有難ふ。それでは午後は何時でも×村へ派遣できるやうに、準備をして置いてくれ給へ』。と署長は薄い口鬚をひねつた。

『承知しました。報告はそれだけであります』。かう云つて警部補は頭を下げて、署長室から出て次の室の自分の席へ歸つた。

午後、平山巡査が本署へ出頭した。そして委細のことを署長と警部補の前で報告した。それに依ると、×村××區の青年某がひそかに主義者達の家を訪問してゐた。それは誰にも知られずに、彼は何回も訪問しては彼等と親しくなつてゐた。そのうち友人で中學の上級生が二人、そのことを知つて、その青年の紹介でまた彼等の家を訪ねて、主義者達と知合ひになつた。そして訪問する度に、雜誌や印刷物を頒けて貰つては持ち歸つてゐた。それが一枚二枚と、次から次へ友人達の間に手渡しされてゐた。郵送されてもゐるらしいので、郵便局の橋本はどうかして、それを嗅ぎ出さうと焦せつた。彼は自分で彼等の家へ出懸け、また自分の弟にも使ひをさせて、どうにかして印刷物を手に入れやうとした。それが出來なければ、彼等と親しくしてゐる村の青年達の名だけでも知らうと思つた。そしてこの方は少し成効して、出入りする青年の姓名は搜ぐり出すことができた。そこで今度はその青年達の往復する手紙に注意した。その結果嗅ぎつけたのが今度の事件で、平山巡査はこの報告を橋本と本署と兩方から受取ると、すぐに目星の附いた青年を取調べて、貰つて來た雜誌や印刷物や、それらの配布先や、平素交際してゐる仲間の氏名やらを、悉く調べあげて終つた。

『包み匿さず白狀して終へばよいんぢや。若し後で嘘を云ふたことが發覺すりや、主義者と同罪ぢやぞ。出版法違反といふて重い罪ぢやから監獄へホリ込まれるぞ』。と平山巡査は、何も知

らない田舍の青年達を嚇して歩いた。かうして半日がかりで集め歩いた證據を、官服のポケットに入れて、この前とはまるで反對に、彼は凱旋將軍のやうな得意さで、自轉車を本署の門前に乘りつけたのであつた。

署長は委細の報告を聞くとすぐ、×村××區の中學生三名と青年團の者四名と、區長とを明朝召喚する手續をとつた、

『明日は午前九時から證據調べぢや。そしてすぐ起訴して終はう。かう云ふことは、所謂疾風迅雷的にやるのが得策ぢやから』。署長はかう云つて警部補の顏を見た。

『さう、それがいいでせう。それでは明朝は私は八時頃に出勤しますか』。と警部補は訊ねた。

『御苦勞ぢやが、さうしてくれんか。早い程よいが、俺(わし)も八時には出勤する』。

署長はかう云つて歸支度をした。ちやうど署長室の時計は、五時を十五分過ぎてゐた。

その夜署長官舍へ一人の男が訪ねて來た。署長はちやうど晩餐をすませて、子供を相手に遊んでゐるところであつた。自分で玄關へ出て見ると、郵便局の橋本がにやにや笑ひながら立つてゐた。

『よう、橋本君か。よく來た、まあ上りたまへ』。彼も顏見合せて笑ひながらかう云つた。

『へ――』。橋本はぴよこんと一つ頭を下げて、默つてのそりと上りかけた。

『さ、此方がええぢやろ』。かう云つて署長は彼を玄關傍の四疊半に案內した。

橋本は署長の後からついて、その四疊半に入つた。そして署長自身で電燈をともしたり、火鉢や茶道具を運んで來る間ぢう、彼は茫然と室の片隅に立つてゐた。彼は何だか自分が此家へ來る途中で考えて來たのとは、ひどく相違するやうな待遇に、取附端(とつつきは)のないやうなそはそはした氣持でゐた。やがて署長は火鉢を中心にして、彼に對合(むきあ)つて座ると

『よく來たね。局の仕事はもう終ひかね』。と云つて薄笑ひを唇に浮べた。

『村の青年がいよいよやられますね』。と橋本は思ひ切つてそろそろと水を向けた。

『ふう、どうして君はそれを知つてるかね』。と署長はさもびつくりしたやうに彼の顏をじつと瞶めた『まだ秘密の筈ぢやが』。

『署長さん、今朝俺が報告したんぢやありませんか』。と今度は橋本がほんとうに驚ろいた。

『何を報告したんかね。僕は何も君から聞きはせん。今日の午後平山が來て、その事件を僕に報告したんぢや』。

『それでも警部補さんからか、平山さんからか話があつたでせう』。と橋本は泣きさうな顏をして『警部補さんに俺が知らせてあげたんぢやもの、何か話があつたでせう』。

『何もそんな報告はなかつた』。署長はにやりと笑ひを洩した。

『それでは約束が違ふ。俺はそのことであんたさまに相談があつて來たんぢや』。橋本の顏は白紙のやうに蒼白くなつて、くしやくしやと顫えた。例の黒子だけが赭黒く際立つて見えた。折角の樂しみの褒美の金が、遽に攫はれた油揚げのやうに、何處かへ飛んで行きさうに思はれた。

『橋本君。君の相談するといふ話はよう判つとる、然し從來警察として君に何も頼んだ覺えはなし――』と署長が云ひかけるを

『いや違ふ、違ふ、違ふ』。とこのスパイは泣聲を立てた『俺は確に平山さんから聞いた』。

『まあ待ちたまへ、橋本君』。と署長は舌打しながら『終まで聞きたまへ。警察としては君の仕事とは何等の關係もない――とまあこれは表面の話ぢや。そこで今度は僕と君との話ぢやが』。かう云つて署長は傍に持つて來て置いた鞄の中から、五圓札を二枚取出して橋本の手に渡しながら

『まあ歸りにこれで一盃呑んで行くさ』。

『いや判りました。それはまあさう云へば、そんなものですわい』。橋本は慌てて、二枚の札を袂の中に押しこんだ。

『ところで今後も宜敷く頼むよ』。かう云つて署長は橋本の顏を輕蔑するやうに眺めた。

『へ、へ、へ、へ……』。と彼は下卑た忍笑ひを洩しながら下唇を突出して鼻傍の黒子を指先でつまんでゐた。それがまるで鼻にくつ附いたダニを引離さうとして、努力してゐるやうに署長の眼には映つた。橋本の顏を見てゐると、署長でさへも、嫌惡の情が胸に湧いて來た。

『僕はこれから一寸外出しなけりやならん用事があるので、今夜は橋本君、失敬する。また折々は際を見て署の方へも遊びに來たまへ』。かう云つて署長は橋本を追ひ立てた。

橋本は袂の中の五圓札二枚を指先で觸りながら、「歸へりには、彼女の顏を拜みながら久振りでうまい酒を鰐腹のめる」と空想しながら、そとの闇の中へせかせかと出て行つた。その後影を玄關の所に立つて眺めてゐた署長は、かつと地面に唾を吐くと

『彼奴は馬鹿な阿呆ぢや。それでも馬鹿ゝ鋏は使ひやうで切れると、昔から云ふからの』。と獨言を喋りながら雨戸をぴしやりゝ閉めきつた。　（大正十三年二月）

K

村　行

一

停車場を出ると闇の底で啼く蛙の聲が、急に爽やかな夜風と一緒に、私の身體に襲ひかゝつた。私は停車場前の廣場の闇のなかにイんで、暫らくの間は四邊の人影に注目してゐた。空虛な水の香りが何處からともなく漂うて來て、久しく忘れてゐた故郷の田舍の思ひ出を、私の胸に活々と蘇へらせた。連日のいろ〳〵な氣苦勞と汽車の疲れとで、干乾らびて茫つとしてゐた私の頭も、この水の香りのなかに浸つて緩んで行くやうに思はれた。

それでもまだ、私の感覺は、犬のやうな敏感さで、闇のなかを物色してゐた。暫らくして、私ははじめて闇のなかから動き出した。そして今度はさも此土地には慣れきつた人のやうに——否、この土地の人間ででもあるかのやうな樣子で、停車場前の廣い通りを町の方へと、急ぎ足

で歩いて行つた。

停車場から町へ入るまでの間――十町程の道程は、燈火もなく眞暗な田圃が續いてゐた。植附けが濟んだばかりの田圃には、滿ち溢れる程に水を湛へて、その水の中では何百匹とも知れぬ蛙が、めい〳〵勝手な聲を張りあげて啼き立ててゐた。水の香り、稻葉のすがすがしい戰ぎ、潮の氣を含んだ微風……何といふ快さだ！　と私は思はず道の上に立留つて空を見上げた。深淵の面を見るやうに蒼黑く晴れわたつた五月の空には、十日ごろの月が、靜かな自然の呼吸と律動を合せるかのやうに、音もなく四邊を照してゐた。

東京から大坂に着いて、大坂と姫路との集會に出席してから、いよ〳〵明日は關西を離れて北陸道へ廻るといふ、前夜の小集會でのことを思ひ出した。一人がそつと私の耳にかう囁いた。

『君が近々に出立するといふことは、彼奴らの方では感づいてゐる。そして停車場を警戒してゐる。君の國の方へも無論電報がいつてるらしいから、兎も角も例の荷物を始末して終はないかぎり、油斷しちやいけない。新聞社の方から搜ぐらしたんだから確かだ』。

そして其時、傍に立つてゐた二三の友人も私が故郷に近づくことを止めた。それで私は故郷を久振りで訪問する機會を斷念したばかりでなく、目的地へ直行することすらも避けて、この途中の驛で下車して終つたのであつた。

『ホントに忌々しい奴らだ』。と呟きながら、私は大切な荷物を肩に擔いで、燈火の明るい町の方へと急いで行つた。

町は靜かな寂しい、しかし感じのいゝ町であつた。いろ〳〵の商店の輝かしい電燈の光りが、人通りのすくない道路を明るく照してゐた。その光りの波のなかを商人風の大人や子供が、ぼつり〳〵と歩いてゐた。軒の庇は低く長く道路の方へ突出してゐた。騷々しかつた都會から終日列車に搖られ通して來て、突然この田舍町へ投げ出されたやうにしてやつて來た私には、町の大通りを歩いてゐながらも、まるで夢の國をでも歩いてゐるやうな氣持であつた。私のこの瞬間の意識と、私の周圍を取卷いてゐる現實との間には、どうしても幾許かの距りがあつた。私の感覺も神經も少しづつだらけ初めた。――といふよりも人間の堪へ得る緊張の程度を通り越

して、次第に放心の心理狀態に陷つて來たのかも知れなかつた。

私は明るい町の、しかし人通りの稀な大通りの中央を荷物を脊負つて行つた。この奇妙な見慣れない姿——眼鏡をかけて洋服を着た、鬚のある男が、大きな風呂敷包を擔いで歩るく姿——は町の人達に非常に不思議な印象を與へたに相違ない。彼方からも此方からも兩側の店先に坐つてゐる人達は、皆一齊にまるで早くから相談して申合せてでもゐたやうに、私の姿に注意深い視線を注ぎかけた。私は自分の肉體が兩方から人間の視線の矢で、蜂の巣のやうに穴だらけにされるやうな感じさへした程であつた。時には店の外へ駈け出して來てまでも、私の後姿を見送つてゐる小僧さへあつた。私は光明(あかつみ)を遁げ匿れる病獸のやうに、急足で機械的に傍目もせず、なるべく顏を人の眼から蔽ひ包むやうに、首を深く垂れ下げてすたすたと歩いて行つた。

軈て町の明るい燈火は次第に數少なくなつた。商店が次第に疎らになつて、屋敷風の家が續き出した。何處も戸を下ろして、寢鎭つたやうにしんとしてゐた。私の姿も次第に闇に匿れることができるやうになつた。ふと疲れた足を止めて、呼吸を吐き帽子を脱いで額の汗を拭いてゐると、蛙の遠音がまた聞え出した。それはこの一列に建並んだ家の背後からであつた。もう直ぐそこの近くに田圃があるのだな、と私は考へながら、じつとその啼く音に耳を澄ませてゐた。無意識の裡に一個のリズムをとつて、高く低く闇のなかを流れる合奏曲……慌しく絶間なく追ひ立てられてゐる私の心、日となく夜となく暗い影のなかに光る眼から監視されてゐる私の心、流動性を失つて次第に乾いて行く私の心——この心の表を撫でさすり勞はるやうにする蛙の合奏曲、意識されない自然の吐息、深い宇宙の一個の脉動が通り過ぎたのを、私は感じた。一個の音律へ、そして尙ほその次からその次へと、波紋のやうに蛙の啼く音は私の心を抱擁する。そして遠い昔の純な思ひのなかに、記憶ばかりでなく、この肉體そのものまでも、こね廻し解體し飜弄する。ノスタルジヤが再び私の胸をまるで刄物で刺すやうに强く、襲つて來た。

しかし逐々私は目分の目指して來た家を探りあてた。私はその工場の入口に立つて、そつと內部を覗いた。工場は眞暗くて、唯左方の受付らしい玻璃戸の附いた室だけには、電燈が明る

く輝いてゐた。私はその門を潜り薄暗ななかを通つて、その受付らしい玻璃窓のところに立止つた。戸外から室内を覗くと、店員らしい廿歳前後の男が三人、机の周圍に坐つたり寝轉んだりして、その日の新聞を讀んでゐた。私は玻璃戸越しにその人達に聲をかけた。

『もし……一寸お伺ひしますが、B君はお在宅ですか』。

この聲を聞きつけて寝輕んでゐた一人が新聞を投げすてると、直ぐ立上つて窓の戸を開けて此方を覗いた。

『B君は……』。と私の聲は元氣なく消えて行つた。

『いま一寸出ましたが……』。と先方も語を曖昧にしながら、不審さうにじろ〳〵と私の顏を眺めるのであつた。

『さうですか……』。と私の聲はまた途切れた。『どちらへお出でになつたか判りませんか』。

『さあ……』。と言ひ淀んでゐると、その背後から覗いてゐた別の一人が

『そりや判りまへん』。と私を追ひ出すやうに答へたのであつた。

『貴方様は全體どなた様で——』。と前の男が今度はまるで詰問でもするやうな調子で訊ねた。

『僕は東京から來た者ですよ。B君は今日僕がここへ來ることは御承知の筈なんですが、別にその話を聞きませんでしたか。』

『あツ。さうでしたか』。と詰問した男は頭を搔きながら『えらい濟まんことをしました。それなら聞いとります。あんた様がその人やとは思はなんだので、こりやえらい濟まんことをしました。Bさんはもう直きお歸りになりますで……否何に、本家の工場に行つて居りますので、もう直き歸ります』。

急に三人は室から戸外へ出て來て、私が室へ上ることを頻りに勸めた。

『どうもえらい考へ違ひをしました、この町で眼鏡をかけたり髯を生やしたり洋服を着て歩る く人間は、學校の教師か警察の者より他にあらしまへんで、こりやどうも濟まんことしました』。と一人は辯解した。するとその後から、また一人が

『それにあんたが此家へ來ると報知せて來た手紙を、工場の主人に捨はれましたのや。すると

主人は直ぐ電話をかけよつて、昨日も工場を調べに來ました。その矢先なので、あんたをさう思ふたのも無理あらしまへんやろ。』

私はそんな話を聞き流しながら

『すみませんがこの荷物を預つて頂けませんか。一寸其處まで用達しをして來ますから』。

かう云ひ殘して私は再び停車場へ引返へして行つた。

二

歩るきながら私の心は困惑の極に達してゐた。懷中の旅費はもう十錢しか殘つてゐなかつた。宿屋へ泊るにも泊れない、汽車で引返すにも引返せない、それかと云つて目的地へ今夜直ぐ入つて行くこともできなかつた。しかし、若し今夜この町でBに會へなかつたら……泊る家がなくて、一夜中この町を彷徨(うろつき)廻つてゐたら……今夜を何處かで過すにしても、森の中の神社か、畠の中の小屋か、何にしても人氣のない、町から離れた、朝になつても人目につかない場所でなくてはならない。然し知らぬ土地でそれがさう容易に發見されるであらうか、發見(みつ)からないと云つて町の人にそれを訊ねることも出來ないではないか？　かう考へて來ると、やはり一刻も早くB君に會つて、懷中の事情を打開けて少しも早く、安全な場所に身體と荷物を匿すより他に術はなかつた。

再び暗い田圃を道の兩側に眺めながら、停車場へ來た。しかし構内は空洞のやうにがらんとして、人影一個見えなかつた。

『やはりBは來てゐないのだらう。しかし今夜僕が此所へ着くことを知つてゐて、家にもゐず、停車場へも來ず、もう九時になると云ふのに何處を遊び廻つてゐるのか』。私は彼の熱意のない無責任な態度を責めなければならぬやうな氣がした。

『後は終列車きりだ。これに乘らなかつたら、何としても今夜はこの町にゐなければならぬのだ。終列車の發車までにもう一時間だ。Bは何うしたんだ』。私の胸の中には途方に暮れた者の持つ暗さが停滯しだした。Bに對する憤懣と前途の旅行に對する懸念と、東京との連絡が絶え

たことなどが、ごた〳〵と一緒になつて、私の神經を苛立てた。

『もう何うでもいゝ。もう一度Bの家へ行つてみよう。』

私は再び町の方へ引返へした。しかし今度は飢と渴と、それに疲勞とが急に私の肉體を襲ひ出した。なかでも渴が何よりも烈しかつた。田圃に盛り上るやうに湛へてゐる水を眺め、何處か遠くから微かに響いて來る水の音を聞いた刹那には、私は何事も忘れて其方へ驅け寄らうかと思つた程に、冷たい水に渴ききつてゐた。終日飲まず食はずに汽車に搖られ通して來て、いま此處にかうして疲れきつた身體一個を自分自身で持て餘してゐる。この瞬間ほど、私は水の中に全身を浸して自由に啼いてゐる蛙を羨ましく思つたことはない。私はその蛙の啼音を聞きながら、今から半時間も前には、その微妙な合奏曲に慰められたのに、今この瞬間には、その蛙を憎みさへした。咽喉は乾びついたやうになつて、僅かに浸み出して來る唾液には苦昧さへあつた。その兩頰の內面の皮膚に浸みる苦昧は、私の心を益々苛立て破壞的な暗鬱な氣分に導いた。

『さうだ一刻も早くB君の家へ行つて、水を飲むことだッ』。

私はこの單純な、原始人の持つ慾望に等しい思ひに追ひ驅られて、夢中の有樣で町中を急いだ。誰が私の背後から追つて來やうが、誰が私の姿に不審を抱いて振向かうが、そんなことは少しも私の心に印象を殘さなかつた。Bすらも、「水」といふ考への中に沈沒して姿を見せなかつた。私の眼前には、浪々と綺麗な清水を汲みこんだ手桶の幻が、執念く附き纏つた。そしてその手桶のなかに私が顏を突込んで、腹の張り裂ける程に水を飲み干してゐる幻、その水が咽喉から胃へと冷たい凍るやうな感じを浸みとほす幻覺——私はこの幻に引擦られて、額からは汗を流し呼吸をはづませて、遂にBの門口を夢のやうな氣持で潛つた。

『まだ歸らないでせうか』。私の聲は乾ききつて咽喉に引懸つた。

『まだですが、お上りになつて待つてお出でになつては何うですか。何うして今夜はこんなに遲いのですやろか、何時もは日が暮れると直ぐ此處へ來られるのですが……』。

『それでは待つて見ませう』。

『それでは何うか此方から』。と云つて一人が工場の機械室の入口の方を指で敎へた。

私は機械室の片隅を通つて、室の隅の入口から事務所の奥の室へ上つた。

『すみませんが水を一杯頂けませんか』。私は坐らないで、無意識のうちにかう云つた。

『水ですか』。と云つて一人は立上つて、直樣鐵瓶を片手にして室外へ降りると、工場の奥へと驅けて行つたが、間もなく歸つて來た時には湯氣の立ち上る熱い茶の入つた土瓶を下げて來た。

私は直ぐそれを大きな湯呑みに注いで、熱いのを我慢して何杯も飲み續けた。漸くにして人心の附いた氣持に復つた私は、これまで吃驚して、唯、まじ〳〵と私の顏ばかりを瞶めてゐた三人に、ゆつくりとした氣持で訊ねた。

『本店は遠いんですか。いま停車場へ行つて見たけれど、B君はゐませんでしたよ』。

『もう歸る時刻なんですがね』。と一人は答へた。そして時計を眺めた。九時廿五分のところを時計の針は指してゐた。

私は茶を十分に飲んで渴もとまると、所在なさに傍の新聞を擴げて讀み出した。それから十分と經たずに、ふと人の氣勢に氣附いて頭を上げると、私の傍にセルロイド緣の眼鏡をかけて少しばかり腭髯を伸ばした、汚れた職工服を身體に着けた、まだ廿三四歲位の靑年が立つてゐた。私がその顏を見ると同時に

『Bです』。とその男は愛想氣もなく答へた。そしてその儘默つて終つた。

『先刻一度此處へお訪ねしたのですが、留守でしたので、また停車場へ引返へして見て、いま此處へまた引返して來たばかりです』と私は言つた。

『主人(おやじ)が何か言ひませんでしたか』。とBは私の話には關係なく、かう訊ねながら薄笑ひを頰に浮べた。

『別に何とも……然し貴方のお留守には少々面喰ひましたよ』。と私も笑つた。

『ところで早速に今夜の宿を何とかしなければならんのですがね……』。と何か思案するらしく指を動かせた。

私はそのBの顏をじつと瞶めた。そしてBの語の意味がはつきりと、最初は諒解できなか

つた。

かう云つて暫らくすると、Bは着物の着換へをすると云つて、一度室から出て行つたが、間もなく紺の單衣飛白の着物に着換へて出て來た。私も一度脱ぎ棄てた上衣に再び手を通して、風呂敷のなかから、齒磨や楊枝のやうな種類のものだけを別に包んで、それを手を下げながらBの後からついて、街道へ再び出た。もう飢と疲れとで、私はへと〳〵になつて、出來ることならこの儘この地面に坐りこみたい程になつてゐた。私は足を、――といふよりは身體全體を引擦るやうにして、Bの後からのろ〳〵と歩て行つた。仰ぐと空は宵の口よりか尙ほ一層蒼黑く冴えて見える。海に近く、空氣の濕りを帶びてゐる故か、大空を瞶めてゐると底の知れないモノトナスな感じが心の内に浸入して來る。何處も彼處も人氣のない程に寢鎭つて、人通りも絶えた、廢墟のなかを行くやうな町の、遠くから按摩の笛が切れ切れに聞えて來る。

町を横へ切れて、田圃の眞中へ出ると、遙か彼方に停車場の灯が燦然として、闇の中に明るく輝いてゐる。田圃の路はうね〳〵と廻りながら、停車場の方へと伸びてゐる。蛙の聲が二人の

身體も埋めて終はんばかりに、四方から氣勢ひ懸つて來る。

『停車場へ行くのか？　然し停車場へ行つて何うしようと云ふのだらう……』。

私は意氣地なくも、この時少し心細い氣になり出したのであつた。

三

三度び私達が停車場へ姿を現した時には、終列車發車時刻の十分前であつた。

驛の待合室で始めてBは、溫泉場の友人Aを始め四人の者宛の紹介狀を私に渡した。そしてかう云つた。

『明日僕が行つて始末しますから、今晩だけ我慢して其處で泊つて下さい。木賃宿ですから、宿賃だつて知れたものです』。かう云つて其處へ行く道順を詳しく教へながら『彼方へ着けば十二時前でせうから、まだ起きてゐます、多分。A君は理髮床の職人ですから、理髮床を訪ねて行けば直ぐ知れます』。

とこんな話をしながら二人は、待合室の片隅で汽車の來るのを待つてゐた。終列車に乗る客はぽつり〳〵と集つた。改札口を開けた時にプラットフォムに出たものは五人あつた。私はこの五人の田舍の客達の蔭に匿れるやうにして、汽車の來るのを待つた。汽車が來る響が遠くから傳つて來た。私は洋服の上衣のポケットに兩手を突こんで、靜かに口笛を吹きながらBの方を見た。Bも私の心持を理解したのか急いでプラットフォムに入つて來た。私はBと肩を並べて、空を眺めてゐた。身體は綿のやうに疲れきつて、唯、もう機械的に手脚を動かしてゐるに過ぎなかつた。それでも前途の不安が、私の心を緊張させ、神經を鋭敏にして、全身の疲勞と空腹とを征服してゐた。しかし私の胸に蝕むやうに侵入して來る心細さは、何うしても消すわけには行かなかつた。

汽車は直ぐ月明の夜の空に、火花を吐き散らしながら、轟々と地面を搖がせて構内へ入つて來た。

『左様なら』。と私はBの手を握つた。

『左様なら』。とBも私の手を握りかへした『彼方の同志に宜敷く言つて下さい。明日の夜はKでは湯祭りですよ』。

『明日はお出でなさい、正午ごろまでには。待つてゐますから』。そして私は急いで車室の内に姿を匿した。Bもプラットフォムを離れて改札口から出て行つた。

私がそのBの姿を見送つてゐると、其處へ慌し氣に劒を鳴らせて一人の警官が入つて來た。そして改札口の所に立つて、じつと車内の方を眺めてゐた。私は鳥打帽を眉深かに冠つて、上眼遣ひに眼鏡越しに警官を見守つてゐた。Bは素早く停車場前の闇のなかに紛れこんだ。降車の客が全部改札口を出て終ふまで、警官はじつと注意深く四邊を見廻してゐたが、やがて足を動かせて、一歩プラットフォムに入らうとした時に、同時に鋭い發車合圖の笛が、靜かな田舍の停車場の空氣を顫はせて鳴り響いた。と。機關車でも同じく合圖の笛で、それに應へた。そしてごとん、ごとん、ごとん……汽車は遂にプラットフォムを離れ始めたのであつた。

『左様なら、左様なら……』

汽車はどん〳〵と月明の夜をまつしぐらに走つて行く。車内に乘合せた客は皆この近在の百姓らしく、默つて、木像のやうに深かい皺だらけの顏を、薄暗い電燈の下に曝しあつてゐる。その見るも痛ましい、搾りぬいたやうな額の皺、長い數十年の間の生活苦を象徴してゐる額の皺、人類の苦惱を一人で背負つて終つたやうなその額の皺。これらの農民が、宿命的なものと觀念せられてゐる、不合理な鐵鎖を斷ち切つて、その胸に、彼等の集團のなかに叛逆の焰の燃え出すのは何時か。その額の皺が悲哀の象徴でなく、奴隷の烙印でなくなる日は何時か。それが歡喜のマークとなり、解放の旗印となる日は、何年の後に來るであらうか……

汽關車の煙筒から吐き出す火花は、晴れた大空に無數の礫を投げるやうに、末廣がりに散つて行く美しさ。轟々と鳴り轟ろく車輪の響の底からその凄じい音響にも打挫がれずに、勇ましく優しく田圃の蛙が合奏してゐるのが、はつきりと聞える。進め！　進め！　前へ！　前へ！　私の胸には、もう落人の寂しさも悒しさも何時の間にか消え去つて、唯、勇取な鬪爭意志だけが焰のやうに次第々々に燃え上る……

次の驛で汽車を降りて、馬車に乘換へ、軈てその馬車がK溫泉場に着いたのは、もう十二時を過ぎてからであつた。私は馬車から降りた唯一人の客であつた。私の他にこのK村行最終の馬車で此處へ來たのは、一尺四方位の魚籠のやうな荷物一個であつた。

私は馬車から降りて、明るくはあるが、しかし寂しい、湯の香の漂ふ何となく四邊の風物のんびりとした溫泉場へ來たことを感じた。寢鎭つた町中を、Bから貰つた地圖を頼りに理髮床を捜した。しかし何處へ行つても、最早や戸を下ろして寢て終つてゐる家の戸をたゝいて、尋ねるわけにも行かなかつた。私は兎も角も、持つて來た地圖と見較べ見較べしながら、東へ東へと歩いて行つた。間もなく大きな公衆浴場のある所へ出た。煌々と街路を照してゐる電燈の光りは、更け靜つた湯の町を一層寂しくしてゐた。私はまるで見棄てられた宿なし犬のやうな頼りないが、しかし來る所へは兎も角も來たのだといふ安心した氣持ちで、公衆浴場の前に立留つた、そして私は直ぐ眼の前に見える、理髮床の明りを眺めて、ほつと溜息を吐いた。その理髮床が、今夜私の訪ねて來たAのゐる家であつた。入口には半分白い幕を引いたきりで、

まだ床屋の職人達は起きてゐるらしかつた。あの職人達の仲間に、Aがゐるのだと私は思ひながら歩いて行つた、

『御免下さい、一寸お伺ひしますが』。と私は白い幕の間から内部を覗いて聲をかけた。

『えつ』。と云つて吃驚した聲を出して一人が私の方を振向いた。他の一人は指先で將棋の駒を弄くりながら、靜かに顏を上げて私の方を眺めた。店には二人の若者が、ちやうど仕事を終つて將棋に夢中になつてゐる時であつた。

『Aさんといふ方はお出でせうか』。と私は不安な氣持ちでかう訊ねた。

『いま一寸湯に行つとります』。吃驚した方の男が私に答へた。

『もう歸られる頃ですか』。と私は訊ねた。

『へえ、もう大分先刻でしたさかえ、程なく歸りますやろ、まあ、お入りなすつて』。とその男は言つてくれた。

私は地獄の底から救はれたやうな氣がした。私は云はれる儘に店へ入つて、Aの歸へるのを待つことにした。身體はぐつたりとして、もう關節の節々が自然と解きほぐれて行くやうな氣がした。朝、汽車に乘る前に輕い食事をしたきりで、先刻の家で茶を無暗と飲んだ他には、何も咽喉を通つてゐなかつた。空腹で眼が落ち込んで行くやうな思ひさへした。それでも此處でかうして、椅子に腰を下ろして『もうこれからは何處へも行かなくて濟むのだ、今夜は此處で安心して眠れるのだ』と思ふと、急に暗い氣持も何處かへ拭ひ去られ、疲れも空腹も我慢できる程に、晴々した氣持になつて來た。私は次第に明るくなつて行く、自分自身の心を瞶めながらAの歸るのを待つてゐた。時計はもう一時五六分過ぎてゐた。

四邊(あたり)が靜かな故であらう。地下から湧き出る湯の音が、まるで鐵瓶の湯の沸るのを遠くで聞いてゐるもののやうに、しゆんしゆんと何處からか微かに聞えて來るのであつた。

私はその湯の湧き出る音に、全身がひき入れられて行くやうな氣持ちがして、いままで緊張し燃え上つてゐた心は、次第々々に靜まり落着いて來るのであつた。恍惚とした氣持ちで、私はAの歸へるのを待つてゐた。しかしAは容易に歸らなかつた。待ち草臥れて、漸くAが歸つ

て來た時には、もう一時半をすつと過ぎてゐた。この三十分程の間、何の所在もなく、一言の語も交はさずにゐた時間の長さ。私はAの顏を玻璃戸越しに見た瞬間に、思はず椅子から立上つた。Aは片手に手拭を下げ、溫かさうに湯氣を吐きながら入つて來た。脊の高い、職人らしくきりつと引締つた色白の顏は磨きをかけたやうに綺麗であつた。見知らない私がゐるのを不審さうにじろじろと眺めながら、火鉢の方へ近寄つて煙草を取上げようとした。私はAに近寄つて默つてBからの紹介狀を見せた。その瞬間には、私の胸の鼓動は平常より少し早くなつてゐた。泊めることを承知してくれるか、それとも謝絕されるか、それともBと同樣に體裁よく他へ紹介するなどと云ひ出すか……私はAが顏に疑惑的な表情を浮べて、その紹介狀を讀んでゐる顏を、眼瞬もせずじつと瞶めてゐた。讀み終つたAは

『まあ此方へ』と云つて私を火鉢の傍に坐らせながら『B君はどうしてゐましたか』と少し吃り々々訊ねた。

『B君には今夜會つて直ぐ此方へ來ることになつたものですから、詳しい話はしませんでした

が、明日午後から此方へ來るとの約束です』。

『手紙にもさう書いてあります。今朝はどちらから、東京からですか』とAは訊ねた。

『京都からです』。

そして二人は默つて茶を飲み出した。將棋に夢中になつてゐた二人も、私等の話に好奇心をそそられるやうであつたが、自分達とは全然關係のない事柄だと判ると、將棋盤を片附けて、生欠伸をしながら『さあもう寢やうやないか』と云ひ云ひ店を上つて、奥の間の圍爐裡の傍へ行つた。私等も茶を飲み終ると、Aは親切に私に云つた。

『隨分腹が空いたでせう。殘り物ですが、それで御飯をたべて寢ませうや。明日は早くに、友人達に知らせて置きます。夜具は汚ないけど、ありますから辛抱して下さい。木賃宿ですから何としても仕方ありません』。かう云つて笑ひ笑ひ煙管を手放して立上つた。

私もAの後から立上つて、店から木賃宿の方へ續いてゐる扉を潜つて、Aと一緒に暗いその梯子段を一歩々々上つて行つた。

『然しここは便利ですよ、宿屋と料理屋と湯屋と理髪床とが一軒の内にあるのですから。明日は早く湯に入りませう。頭の方は私がひとつ當つてあげます』。暗いなかでAは私にかう云つた。私は思はず蓬々と伸びた自分の頭髪や頰鬚に觸つて、暗闇のなかで一人で苦笑を洩した。

この時、突然に更け靜つたしんとした闇のなかで、何かに吃驚でもしたやうに宿屋の大時計が、ぶうん、ぶうんと二つ鳴り響いた。（大正十一年五月）

決闘

一

運動場では今日の最後の課業の、器械體操が終つたばかりの時であつた。生徒達はまだ木馬の周圍に集つて、若い教官――陸軍士官學校から、毎週二回教えに來る歩兵軍曹――の話に耳傾けてゐた。

歩兵軍曹は三年前に自分が經驗して來た、奉天、沙河の戰爭の烈しかつた思ひ出を、今日も得意らしく話してゐた。廿名餘りの生徒達は、その話に夢中になつて昂奮してゐた。午後二時ごろの冬の日の光りは、暖かくこの一群を照してゐた。四囲はひつそりと靜まりかへつて、時々、日の溫かさに碎ける氷の音が、何事かを思ひ出しては呟くやうに聽えるばかりであつた。

私も皆の者と一緒に、木馬に跨つて、軍曹の話に聞き惚れてゐる所へ級友（クラスメート）の河村が駈けて來

て

『仲木が君を呼んでゐるよ、化學教室の裏の芝原へ來てくれつて』。と息をきらせながら云ふのであつた。

『芝ッぱ(芝原)でか』。と私も訊ねかへした。

『うん』と河村は輕るく首肯きながら『君にさう云つてくれつて、僕に賴んだんだ。早く行づて見ろ、大變な話を聞かせられるから』。河村は滿面に薄笑ひを浮べながら、小さな聲で私に告げた。そして「早く行け」と云はんばかりに、私の背を自分の肘で突いた。

私は直ぐ化學教室の方へ駈け出して行つた。化學教室の裏は、ゆるい勾配(スロープ)の斜面になつてゐて、それが學校と地續きの寺院の方へとなだれて落ちてゐる。斜面一帶の芝草は末枯れて、その末枯れた芝草の盡きた所に木柵があつて、それを境界線にして、その外には寺院の森が小暗く茂り聳えてゐる。そこの日溜りになつた窪地の芝生の上に、仲木が茫んやりと腰を下ろして、何を眺めてゐるのか前方を瞶めてゐた。私は仲木のその姿を見ると、一寸立止まつてその視線

の落ちてゐる邊を眺めた。しかし其處には、芝草の上の日蔭の所斑らに消え殘つた雪のほかには、何ものも私の眼につくものはなかつた。柔らかい芝草を踏む私の靴音は、仲木の耳にはまだ入らぬらしかつた。彼はやはり茫んやりと眼前を瞶めたまゝ曲(かが)めた膝の上で、兩腕を組んで背を圓くしてゐた。

『どうした仲木』。と私は聲をかけた。

この聲に始めて氣がついたやうに、ふつと私の方を振向いた仲木は、急に顏を輝かせて片手を高くあげて、日光の眩しさを防ぎながら、滑々(すべすべ)した大きな顏に笑ひを浮べた。

『まあ此處へ降りて來いよ。一寸話があるんだ。』と彼は平常のやうな活々とした聲をかけた。

『何だ、また何か出來たのか。』恁う云ひながら私も、窪地の方へと斜面(スロープ)を滑り降りた。

仲木は私の手をしつかりと握つて、凝つと私の兩眼を覗きこんだかと思ふと、見る間に昂奮した血がさつと顏に漲つた。

『僕は決鬪を申込まれたんだ』。と云つて、更らに强く指先のしびれる程に私の手を握り締めた。

『決闘？』。と私は驚ろいて訊ねかへした『誰と決闘するんだ、どうしてだ』。

『決闘だ』。と仲木は再び恁う繰りかへした『僕が今日の晝飯の時に食堂に入つて行くと、三年の大川が入口のところに立つてゐて僕の姿を見ると近寄つて來て敬禮しながら、眞直ぐに僕の方に手を差出すのさ。どうしたのかと思ふと、彼奴、手紙を持つて來たんだ。それを僕に渡しながら「僕は頼まれて來ました、讀めばわかるのださうです。僕はそれだけしきやしりません、僕は頼まれたのですから」と云ふのさ。だから僕はそれを受取つた。それで……』。

『一寸、待つてくれ。大川つて、例の三年の代表的美少年だらう、ええ』。と私は仲木の語を遮ぎつた。

『さうさ、鈴田のあれさ。だから僕も見ない先から鈴田の手紙だとわかつたさ。しかし何でそんなことをするのか、僕にはわからなかつた。開封してみたら、それが決闘狀だつた』。

仲木は大きな頭——俗に云ふ巾着頭の上に冠つた帽子を前に引下げた。彼の顏には決闘の話をしながらも、それに就ての恐怖の色らしいものは影さへも見えなかつた。その反對に體の底

から湧き上つて來る張りつめた力が、彼の顏に充滿してゐるやうに思はれた。この話に一層昂奮した彼の顏色は、仄のりと美くしく輝いてゐるとさへ思はれた。

『どういふ理由で』。と私は仲木に、その手紙の內容を訊ねた。

『例の一件さ。先週野外演習の時に、僕が三年の奴等の中隊長をした時、大川の奴が狡滑けやがるから擲ぐつたらう。あれを根に持つてやがるのさ。』

『復讐戦か』。と私は呟いた。

『さうだ』。と仲木も私の聲に呟きかへした。

『それで君はやるのか』。

『ああやるよ』と仲木は、まるで笑談事でも話してゐるやうに、無雜作に答へて私の顏を眺めたが、私の心中を讀んだやうに『それでは君は僕が決闘を斷ると思つてたのか。そして鈴田に謝罪るとでも思つてたのか。誰がそんな眞似が出來るものか』。恁う云つて彼はぷつと唾液を吐いた『僕はやるよ。やるとも、そして眞向から鈴田の奴をやつつけてやるんだ』。

私は仲木のこの話を聞きながら、次第次第に心持が暗鬱になつて行つた。私はこの心持を押し退けて、活快な氣分を入れ換えやうと努力しても、本能的に私の肉體が仲木の語を反撥して、尙一層心持を重苦しく沈鬱にした。

『ぢや、どうしてもやるね』。と私は胸の底から何か重苦しいものを吐き出すやうな聲で訊ねた。

『ああやるとも。そこで君にお願ひがあるんだ。他の奴等はさあどなると駄目だからね。君に頼みたいんだ、君なら安心して出かけられるから』。と仲木は一呼吸に喋り續けて私の顏を覗きこんだ。

『何だい、それは』私は先を促すやうに訊ねた。

『介添人だ。君はなつてくれるだらう』。恁う云つて彼は私の手を三度び强く握り締めて、私の心の祕密を盜み見やうとでもするやうに、凝つと私の兩眼を瞶めた。

『いいよ』。私は簡單に答へて、同じやうに仲木の眼を瞶めた。

さうして二人は暫らく沈默の裡に、各自の心の動搖を瞶めるやうに凝つとしてゐた。そしてふつと氣がつくと、私は仲木の顏に急激な變化のあるのを發見した。默つて私から顏を背向けて、他面の一所を瞶めてゐる彼の顏には、平常から色の白い皮膚が今は蒼味を帶びて、冷たく化石したものを見るやうに見えた。眼は力なく沈んで、何處を見るともなく茫んやりと見てゐる。それは外部の何者をも見てゐるのではなくつて、彼自身の內部の何處かをいつしんに瞶めてゐるのだと、私には思はれた。私はこの總てを眺めた瞬間に、先刻彼が背を圓くして、茫然と腰を下ろして私を待つてゐた時の、彼の顏色や心持を想像することが出來た。そして私はいま彼の心の中で死の想像に對する恐怖と憂鬱と、私と同じやうに廿歲時代が持つ虛榮心とが、渦卷き鬩ぎあふ彼の心の惱ましさを感ずることが出來た。

私は仲木と同じ惱ましさを、私の心中にも感じながら、仲木の傍に腰を据ゑたまま、凝つと殘雪の上を瞶めてゐた。もう立春を過ぎて一週間に近かつた。二月の珍らしく風のない、日の光りの靜かに暖かい日であつた。その暖かさの滿ち渡つた蒼空には、小鳥の飛ぶ影が頻りに映つた。その啼聲も何處からとなく賑かに聞えて來た。私はもう間もなく、ほんとに春が來ると

『それで鈴田の介添人は決つたのかしら』と仲木に訊ねた。

『誰かしらん。本田だらうと思ふが、それとも誰かあるのかなあ』。と仲木も沈欝な聲で答へた。

その顏に私は仲木の方を振向くと、彼の額には暗い影が浮んで、氣の故か小鼻のあたりが淋しさうに見えた。彼は私と顏を見合せると、急にごろりと彼方向きに芝草の上で寢返へりをうつた。

私は仲木の眼眸のなかに、人間がほんたうに純粹になりきつた時に持つ、人間らしい恐怖を發見した。しかし見てゐるうちに、その眼眸からは親しい人間味の勝つた恐怖の色は消えて行つて、別なものがそれにかはつた。すると一瞬間、誇らしげな明るい光りが彼の顏に射して來たかと思ふと、それはぱつとしたばかりで、直ぐ次の瞬間には暗い不安な色が彼の顏のあたりを苛立たせた。それから恐怖が來て、次に何か眼に見えぬものに對つて、全身が打衝かつて行くやうな苦しい努力の表情が彼の顏中に浮いて出た。

『それぢや明日、僕が鈴田に會つて決めやう。一切の條件と武器と場所と……僕のいいやうに任せて呉れるか、それとも君に何か特別の條件があるか、仲木』。

『僕はどうだつていい、全部君がうまくやつてくれれば……』と仲木はまた寢返へりをうつた。

二

其晩、私は寄宿舍の自分の室の窓に凭れて、玻璃戸越しに空を眺めてゐた。月の姿は見えなかつたが、月光は果から果へと隅々まで照り渉つて、水のやうな靜寂が大空いつぱいに滿ちてゐるやうに思はれた。

私はその靜かな冬の夜景色を眺めながら、今日の晝間考へた決鬪に就ての思想を再び思ひ浮べてゐた。それを考えてゐると、私の肉體には磨ぎ澄した鋭い刄物が、皮肉を破り骨を刺して行くやうな鈍痛を感じた。

建物の日蔭に消え殘つてゐる雪は、かつきりと白銀のやうな輝きを見せて、月光の下で照り

かへしてゐた。月光に背いた闇の中の殘雪は仄白く、寂しく冬の闇の中に浮き出てゐる。そこら一面に沈默が――聲あるものが聲を出し得られない靜寂が――無氣味に擴がつてゐるやうに感ぜられた。この靜かな魅惑するやうな月の光りも、またそれから呼び覺される青春期の詩的空想も、その空想が連れて行く未知の世界への神祕な自由な幻想も、この生々しい現實の恐怖をまつたく征服して終ふことは出來なかつた。不思議な幻想と鈍痛とが私の肉體を惱ました。そして晝間よりも一層私の心を憂鬱にした。

そこへ河村がそつと入つて來たのであつた。

『いい月夜だなあ、こんな晩には相互にこんなスバルタ學校にゐるのが嫌になる』。恁う云つて彼は薄い唇を引歪めた。蒼白い彼の顏が笑ひの爲めに、一層冷嘲的に見えた。

『皆はどうしてる』と私は河村に訊ねた。

『誰も彼も駄目だ』と河村はまづ吐き出すやうに恁う云つて『仲木の奴も駄目だなあ、無暗と昂奮ばかりしてゐて、あれぢや今度の決鬪は仲木は危いぞ』。

『どうして仲木は喋り散らすんだらう』。

『そんなことを僕が知るものか。しかし恐らく仲木は決鬪する事が恐いんだよ』。と河村は冷かに云つて薄笑を洩らした。

私は冷かな河村の語をなじるやうな語調で彼に話しかけた。

『今度のことを君はどう思つてゐる。實に愚劣ぢやないか』。

『そうだ。それは君の云ふ通りだ』。と河村は憂鬱な聲でそれに答へた。『しかし、僕等の生活から血は血に依つて酬はれるといふ語が滅びて行つたら、後には何が殘ると言ふのだ。僕等の生活は實際不合理だ。その不合理を、人間性を無視して漸く築きあげた生活を、合理化さうとして慥えた哲學が「血は血によつて」と云ふ思想なんだ……馬鹿なつ』恁う云つて河村はズボンの衣囊(かくし)に兩手を突込んで、肩を聳かした。私はその河村の姿を凝つと瞶めた。電燈を背にして月光を浴びてゐる河村の顏は冷たさうに輝いてゐた。

『君は何を疑ふんだ』と河村は私が不審さうに彼を眺めてゐる顏を見返へして『それは君のブ

ーシュキンやレルモントフの罪だ。彼奴等は君に決闘の術を敎へたと同時に、愚劣な哲學も敎へたんだ。そんな哲學なんか君に何の關係がある、君は決闘の術さへ覺えればよかつたんだ』。

『否』と私は叫んだ『僕等は餘り「血の哲學」を安價に取扱つてゐるよ。美少年騷ぎから、決闘をするなんて』。

『二人が馬鹿だからさ。人さへ殺せば傑いんだと思つてるやうな馬鹿だからさ』。河村は冷然こしかし憂鬱な微笑を洩しながら答へた。

『君は二人が血を流し合ふことを笑ふんだね』と私は氣色ばんで彼につめよせた。

『笑ひはしない。しかし狂人二人が勝手に喧嘩するのを、僕がどうすればいいと云ふのだ』。

『どうにかして止させる方法はないだらうか』。こ私は河村の顏を瞶めた。

『さあ、しかし、それは駄目だよ。二人とも相手を恐がつてゐて、靜かに今度の事件を考えて居る餘裕がないのだよ。ほんたうに馬鹿な奴の集團だ』。河村は恁う云つて淋しさうに笑つた。

しかし直ぐ彼はその笑ひを止めて、月光に輝く殘雪の表面を凝つこ瞶めてゐた。そして頻りと靴の踵を打合せた。

そこら中がひそまりかへつてゐるやうに私には思はれた。しんしんと更けて行く冬の夜の氣勢に押されたやうに、物音ひこつ寄宿舍の中から響いて來なかつた。私はその不思議な力に胸を壓されるやうな氣がして、平常は何の氣もなく通り過ぎて來た靜寂——その天こ地この間の靜寂が、もの恐ろしいやうにも思はれるのであつた。河村はと振返ると、彼も何ものかに打たれたやうに、私に背を向けて凝つこ瞑想に沈んでゐるらしく、全身に月光を浴びたままで銅像のやうに見えた。

三

ああ蹄跡の
ほとりに君と
深く契を結びしが

樂しき夢も
いま早や昔――

凍つた雪の上を彼方此方と歩るき廻りながら、鈴田は兩手をズボンの衣嚢に入れてこの歌を口笛で吹いてゐた。その樣子にはこれから決鬪する人のやうなところは、少しも見ることは出來なかつた。背の低くい身體を今日は一層圓く曲めて、淺黑い顏と薄い唇とには、人間を馬鹿にしたやうな微笑を見せてゐた。鈴田の介添人の吉安とその他の二人は、默つて鈴田のこの有樣を眺めてゐた。

私達の仲間も仲木を取卷いて、馬繫所のところに集つてゐた。冬の間ぢうは人通りの絕えてゐる野原の雪は、一面鏡のやうに地の面に凍りついてゐた。双方七人の生徒はこの積雪の上をざくざくと踏み碎いて、ぶらぶらと歩き廻りながら、何といふことなしに互に睨み合ふやうに默つてゐた。

軈て吉安が彼方の群から離れて私に近寄つて來て恁う云つた。

『君が……君が審判官に立つのは當然だ』と彼は明かに昂奮してゐた。

『さうですか』と私も强く答へた。

『早くして下さい。ぐずぐずしてゐると日が暮れる』と吉安は忌々しさうに叫んで、窪んだ眼をぎろりと光らせた。

寒い風が吹いて來た。空には鳩羽色の雲が幾重にも重なりあつて、日の光りを匿してゐた。私は持つて來た棒を雪の上に立てて、そこから左右へ五歩づつ數へた。そしてその雪の上に踵でしるしをつけた。その間ぢう、鈴田は私の方をちらつちらつと横目で見ながら、口笛を吹き續けた。

『それでは』と私は大聲で叫んだ『勝負はこの場限りのこと、當人二人ぎりのことだ。時間は十分間、兩方ともそれで承諾しますか』。

仲木は手を擧げて私に同意を示した。河村は例の憂鬱な顏を俯向けたまゝ、私の方を見返へらうともしなかつた。鈴田は首肯いて白齒を見せたが、直ぐ上衣を脫ぎにかかつた。

『二人とも場所について呉れたまへ』と叫んで私は兩方にその場所を指した。そして指定の位置に出た二人は憎悪と侮蔑の籠つた眼で、相互に相手の顔を睨みつけた。

この瞬間に私は生れてはじめて、憎悪の感じ以外に何ものも所有してゐない人間の眼を見た。二人の眼はまるで硝子のやうにぎらぎらして、眼瞼のそとへ迫り出しさうに思はれた。白晝、太陽の下で、理性を失つて憎悪に痙攣した人間の顔を見てゐることは、私にとつては一個の恐怖であつた。その恐怖に襲はれてゐながらも、しかし私は自分のすることを忘れてはゐなかつた。私は時計を手にして、その盤面を瞶めながら叫んだ。

『一ッ……』

この聲に二人は身構えして、じりじりと一足づつ要心しながら近寄つた。

『二ッ……』

私の頭は茫つとして、今自分が何をしてゐるかを辨別しなかつた。唯、私の背後に四人の者が集つて、片唾を呑んでゐる氣勢を感じた。そして時計の長針が正確に9の文字を指した瞬間に、私は力限りの聲を出して、

『三ッ……』と叫んだ。

しかし次の瞬間に、私が時計から眼を放して見た情景は……仲木が素早く續けさまに鈴田の頬を擲ぐつてゐた。鈴田は左拳を横腹にあてて身構えしながら、右腕で仲木の打撃を防ぎながら、相手の身體に絡みつかうとしてゐた。仲木は續けさまに鈴田を打つて、鈴田の鼻からは眞赤な血が噴き出してゐた。しかし次の一瞬間のうちに、今度は仲木が雪の上に投げ倒されて、鈴田の足の下に踏みつけられて終つた。鈴田の拳は仲木の頭と云はず肩や胴や腰と云はず、唯もう滅茶苦茶に落下してゐた。仲木は兩腕で頭を抱えて相手の拳を防ぎながら、起上らうとして蹌いたけれど、その度に鈴田に蹴倒されて、最彼には仲木は俯伏せに顔を雪の中に埋めて、悲鳴をあげて呻吟き出した。鈴田はいよいよ勢にのつて來て、仲木の上に馬乘りになつて、力の限りに亂打を加へてゐた。仲木の耳は裂けて血が襟を眞赤に染め、それが滴り落ちて雪をも赤くしてゐた。しかし、時計はまだ五分しか經過してゐなかつた。

『早く時間がたてばいい……』と私は考えた。私は地の底へ何者かに引擦り込まれるやうな惱ましさと、眩暈と頭痛とを感じた。そして凝つと雪の中に立つてはゐられなくなつた。急に眼の前が暗くなつて來た。私は再び時計を見ると、漸く二分しか經過してゐなかつた。『早く經てばいい……』と再び私は思つた。私の神經は苛立つて來て、時計の針を追ひ立てるやうに、私の瞳は鋭くその針を瞶めてゐた。二十秒……三十秒……四十秒……そして漸く一分。とこんな風に時計の針を追駈けてゐると、時計の針の進みと一緒に私の神經も少しづつ狂つて來るやうな氣がした。

漸くまた一分が經つた。『あと一分……』と私はほつと溜息を吐いた。

その瞬間であつた。仲木の上に跨つてゐた鈴田が、突然にあつと大聲をあげると同時に、それは到底人間の聲とは思はれぬ奇怪な叫聲を出しながら、雪の中へ轉がり落ちた。彼の片足からは靴が脱げ落ちて、腫のところには小さな孔があき、そこから鮮血が、だくだく流れてゐた。雪の上を轉がり廻る鈴田の後には、赤黑い血の跡がべたべた殘つた。

私は『終』と叫んで兩手を高く空にあげた。吉安等は鈴田の方へ、河村は仲木の所へ、同時に駈け寄つた。

仲木は雪の上に倒れたまま起上ることさへ出來なかつた。河村は仲木を抱き起こしたが、彼の口は眞赤に染つて、その齒と齒の間には靴下の切端（きれはし）を固く嚙み締めてゐた。河村はそれを引ちぎるやうにして、仲木の口から吐き出させた。そして其處へ吉安等と一緒に跛足をひきひき近寄つて來た鈴田と握手させた。仲木の顏は見るも嫌らしく一面に腫れあがつて、紫色の斑點と生々しい血の痕とが、腫れた顏を汚してゐた。鈴田も仲木と握手しながら、血だらけの顎をがたがたと慄はせてゐた。そして私達に挨拶をすませると彼等は一團（ひとかたま）りになつて雪の上を歸つて行つた。

寒い風が吹いて、四邊りはもう黄昏れて來た。日の沈む前の空の擾亂が始まつたらしく、鳩羽色の雲の壁が少しづつ動搖してゐた。

仲木は一人で立つてゐることは出來なかつた。私と河村とが兩方から彼を抱えて立つてゐ

た。この時、黄色い夕陽が僅かな雲間から、光りをこの雪の野原に投げかけた。夕陽に照らされた仲木の顔は、水死の人の顔やうに腫れあがつて、見てゐる間にその腫れは増して來て、兩眼は絲のやうに細くふさがり、鼻は腫れて、今から十分前までは白く美しかつた彼の皮膚も、今は二目と見られない醜くいものに變つて終つた。それを見ると河村は何か苦いものでも口中にねぢ込まれた時のやうに、眼口を顰めて仲木のこの姿から顔を背向けながら

『俺達も歸らうぢやないか』と云つた。

『仲木、歩けるかい』と私は仲木に訊ねた。

仲木は何かそれに答へやうとしたが、彼の口からは唯微かな呟聲が洩れるばかりであつた。そして彼は私と河村から離れて一人で歩き出さうとした。然し私達の手を放るれや否や、彼は直ぐ雪の上に轉んで終つた。それでも彼は起き上らうと努力したが、腰がまるで立上らなかつた。河村と私とは再び彼を抱き起して、彼の兩脇へ私達の肩を差入れ、彼を吊上る程にして雪の上に立たせた。そして三人はそろそろと歩るき出した。凍つた雪の上を曳擦る靴の音が黄昏の靜寂の裡に鋭く響いた。

私はその響を聞きながら心の滅入るやうな憂鬱を覺えた。そして冬の黄昏の空氣が重苦しく私の胸を押えつけた。それが私に呼吸苦しさをさへ感じさせた。しかも一刻一刻それが烈しくなつて來て、突然に私の頭の方へ血が逆流して來るのを覺えたのと同時に、胃の方から苦がい液體を突戻して來た。そして生溫かい液體を咽喉の奥から私は吐き出した。

『靜かにして、靜かにして』。と河村は云ひながら、一人で仲木を抱えた『みんな吐いて終ふさいい。みんな吐き出して終ふさ……』

私は雪の上は突伏す程に頭を下げて、そのまま其處に彳んだ。そして河村に言はうとすると、直ぐまた眼が眩んで來て、嘔吐しさうな氣持になるのであつた。

『暫らくしてゐて、なほつたら後からやつて來たまへ。僕は一人で大丈夫だ。そろそろ仲木を連れて行かう』。恁う河村が云つた。

私は默つて微かに首肯いた。そして河村と仲木の靴音が次第次第に遠ざかつて行くのを聞い

てゐた。

暫らく經つて私は頭をあげた。日の光りは地上からすつかり消えてゐた。暮れ殘つた雪の原には誰一人の姿も見えなかつた。見る限り仄白いなかに、唯すこし離れた馬繋所の傍の雪が踏みしだかれて、黑い地膚を現はしてゐた。其處から一間ばかり離れて黑い塊が一個、雪の上に落ちてゐた。私は凝つとそれに眼をそそいだ。それから靜かに立ち上つて、そろそろ近寄つて行つて見ると、それは靴の片方であつた。手にとつてそれを顏に近づけると、血の痕がはつきり見られた。

『果して血によつて總べては淨められたらうか――』。私は血痕の附着した片方の靴に、凝つと視線をそそぎながら考へてゐた。『僕等の仲間が眞理のやうに喋つてゐる通りに、血によつて果して一切は淨化されるだらうか』。

寒い風が吹いて夕闇は雪の野を領してゐた。それは夕暮といふよりは、既に夜と呼ぶのに相應しい時刻であつた。格闘の跡も、そこに流れてゐる筈の血の痕も、私の手の中にある靴でさへも判然せぬ程に、濃く深かく夜の闇がひたひたと四方から押し迫つて來た。私はその闇の中に立竦んだまま、片手に靴を下げて考えこんだ。

『何といふことだ。たとへ血は血によつて淨められることがあつても、人と人とが血を流しあつて平氣でゐられるとは――これは何といふことだ』。

また一吹き寒い風が闇の中を吹き過ぎて行つた。

四

仲木と鈴田との格闘後、もう一ケ月以上も經つて終つた。二人の負傷も癒え關係者一同の處罰も解除されて、卒業式も間近かに迫つて來た。さうして總べてが舊に復したこの頃になつて、私の心は今まで思ひも寄らなかつた動搖を感じ出した。

遂々堪えられなくなつて、或日私は河村に話しかけた。

『君は僕を卑怯な憶病な人間とは思はんか』。

『そりや思つてるよ。君は憶病者だ』。河村はきつぱりと恁う答へた。

私は吃驚して河村の顏を何時までも凝つと瞶めてゐた。と、河村はその後をまた續けて云つた。

『然しそれは君ばかりぢやないよ。皆がさうなのだ。鈴田だつて、仲木だつて、僕だつて、他の連中誰だつてさうさ』。恁う云つて彼は憂鬱な微笑を洩した。

『僕は恐怖を覺えてゐる。僕があの時に何をしたか、總べては連絡のある反射作用に過ぎなかつたのだ。僕はその反射作用のために褒められてゐる。それなら何故アミイバの運動を褒めないんだ』私は總べてを懺悔するやうな氣持で、河村の前でそれからそれへと述べ立てた。私が昂奮しきつて呼吸をはづませて語り續けるのを河村は默つて聞いてゐた。最後の言葉を語り終つても、河村はまだ啞のやうに默つて私の前に突立つてゐた。暫らく――ほんたうに暫らく經つてから、河村は靜かに語り出した。

『君は實際人一倍憶病だよ。それと同時に……これを皮肉だと解釋してはいけないが――憶病なのと同程度に勇敢だ。つまり君の良心は他人の數倍も敏感だ。良心といふ奴は、大抵な社會では必要なものだ。然し住む世界によつて樣々な形で、この良心を要求してゐる。だから僕等の住む軍人社會でも良心は勿論必要な品物なのだが、しかし君の持ち合せてゐるやうな、自分の憶病に氣のつくやうな、良心は悲しいことには入用ぢやないんだ。必要なのは自分が國家の英雄であり、國家は自分達のやうな英雄によつて支配されてゐる――と云ふ良心なのだ。その爲めには、何時でも安價に自分の生命を提供し得る英雄が入用なんだ。それ以外の個性の自由活動は吾々の世界では、恐る可きバチルスとされてゐるんだ。つまり軍隊で入用なのは仲木や鈴田の持つ程度の良心を歡迎する、そして君のやうな人間は現代國家と、その國家を守護する軍隊にとつては一個のバチルスだ。それは極力撲滅しなけりやならんものだ』。

『さうだ』と私はそれに答へた。

『人間は皆自個の爲めに、自個の幸福の爲めに生きるのが眞實だ。それ以外に何も人生に眞理はない。唯、生の幸福、平和の享樂が人生の唯一の眞理だ。これ以外に何が人生に存在すると

君は思ふか。鈴田や仲木は、この唯一の眞實を知らない。それは奴等が大馬鹿者だからさ。それだからこそ、自分達だけが帝國を守護するんだなんて夢想してゐられるんだ』。

河村の眼は冷たく光つた。彼は癖のやうに兩手をズボンの衣嚢に突込んで、昂然と肩を聳かしながら、赤皮の長靴の先に力を籠めて足下の小石を遠くへ蹴飛ばした。

『さうだ』と私はまた憂鬱な聲を出した。

『君はいま岐路に立つてゐる。然し撰擇は君の自由だ。君は君自身の幸福を掴むがいい。それは君の自由だ。O Miserable Prisoner』恁う云つて河村は憎むやうに私の顏を見た。

春の日の黃昏の色は、運動場いちめんに淡く流れてゐた。私は小脇に抱えた幾何學のノートを砂の上に落すと、そのまま其處へ膝を突いて終つた。すると突然に河村が、肩をぐつと聳かし滿面に苛立たしい表情を浮べて、吐き出すやうにかう云つた。

『馬鹿なつ、君は血を見てから神經衰弱になつたな。馬鹿つ』。（大正八年二月）

憶病者

一

休職判事の息子で今年大學の二年生になる彼が、晝寢の苦しい夢から醒めた時には、戸外には糠雨が糸のやうに煙つてゐた。

學校を止してこの田舍の父の家へ歸つてから、今日でまる一週間が經つた。然しその一週間を、彼は默つて家の者とも碌に口をきかないで、否寧ろそれを恐れ逃げるやうにして、一室へ入りきりで暮して居た。時々は思ひ出したやうに、父が室へ訪ねて來て大學のことや病氣の模樣などを訊ねるのであつたが、彼はさもそれを辛さうにして漸つとかう答へるのであつた。

『お父さん、そんなことはこの後にして下さいませんか』。

『ふむ』と父は頭を振つて『ぢや、身體は何うなんだ』。

『え、大分いいやうですよ』と彼は顏を背向けて默つて終ふのであつた。

父は苦々しさうな思ひをその兩眼に凝めて、息子の意地惡るさうに默つた姿を睨めながら、鼻先には强い冷笑を浮べながら、そろそろと室の外へ出て行くのであつた。そして自分の妻の所へ來て

『彼奴は俺の息子だが、何うも氣に喰はん奴だ』と呟き出す『彼奴は一體何を考えてをるのか、彼奴の頭のなかには何んなことが生長してゐるのか、俺にはさつぱり判らんのだ』。

『可哀想に、あれのことをそんなに云ふものじやありませんわ。きつと何か苦しいことがあるんですよ』。と判事の妻は答へた。

『否、俺にはその苦しいと云ふことが判らんのだよ。何の爲めに大學までも行つたのだ……否否、彼奴の頭は何もない空虛ぢや、その證據にはこの間俺の意見に對して、何もよう云ひ得なかつたじやないか。それで高慢な風をして、この俺を笑つてゐたのだ。さうだ、彼奴にはそれより他に何も出來ないのだよ』。

『否、違ひます』と妻は眞赤になつて、突然に口を挾んだが『可愛想にあれにはあの時に云ひたいことが澤山にあつたのでせうけれど、貴方の眼が恐くつて默つたのですよ。あれの意見は貴方のよりはもつともつと立派な——さうですとも立派な立派な意見なのです』。

『何が俺よりは立派だ——』と判事は怒鳴つた『世間知らずの、空想家の、高慢な理想家の……』と彼は再び息窒つた。『俺はあの生白ろい顏と、あの思ひ上つた眼を見ただけでも、胸糞が惡るくなるわい』。

『貴方は何故そんなことを仰言るのです。あれは苦しんでゐるのですよ。大きな大きな苦痛を凝つと堪らえてゐるんですよ、それに貴方と云つたら。まあ……』。

『その苦痛がお前に判るのか、その苦痛の原因がお前に判るのか』。と判事は一層せきこんで怒鳴り立てた。

『いいえ、それは私にも判りませんわ、けれど私達よりずつと離れた、そして大きな苦痛をあれが持つてゐることだけは判りますわ。それは確かですの、私はあれの母ですもの、血を分けた私の子供の苦しみは、私にも自然に知れて來ますわ』。

判事は白髪の交つた頭を烈しく振つた。『何の苦痛だ、そんなものは皆あれの昔の……東京にゐた頃の放蕩の報いだ。俺達は人並以上の生活をしてゐる、彼奴とてさうぢや。何時俺が彼の爲めに學資の送金を遲らせたことがあるか、それともお前はさう思ふのか』。

判事の妻は夫のこの語を聞きながら、切なさうにその膝を瞶めたまま默つてゐた。

それは丁度晩餐を終えたばかりの時であつた、二人は開け放した障子を背後にして、新綠の庭から流れて來る、冷々した雨後の青葉の匂を嗅ぎながら、緣に座つてかうして話してゐたのであつた。二人の間のたつた一人の息子——老後の杖とも柱とも力にして賴んで居た唯一人の子息が、今度突然に大學を止めて家へ歸つて來た。そして何を聞ても啞のやうに默つたまま、一日一日と親と子の間に、何者か眼に見えない冷たいものが蔓り擴がつて行くのが感ぜられる。

『ええ、忌々しい。これは皆彼奴の所業だ』。と老判事は苛々として手を慄はせて自分の子息を罵つた。

『本當に何うしたのでせうね。もとはああでもなかつたのに……』と妻も重い溜息を吐いた。

呪はれたこの一家を支配してゐる、變な冷酷な氷のやうなもの、親と子の間の愛を引離さうとしてゐる憎くむべき思想——若しそのものが確かな形があるものなら、よしそれが惡魔のやうな物凄い形相をしてゐるものであつても、老判事はそれに飛び懸つてずたずたに引裂かずにはゐられなかつたらう。判事の眼には海底のやうに冴えた五月の空も、その空に魚の瞳のやうに閃めく星も、またこんもりと茂つて、花の咲き亂れた躑躅の姿も、その他の何の姿も彼の眼には映らなかつた。彼の頭のなかに此時浮び出てゐたものは、一日中電車自動車其他の雜音の絶えない、また塵埃に塗れたけばけばしい建築物、氣の狂つた野獸のやうに一刻の靜止もなく歩るき廻る人影の絶えない都會の幻像ばかりが、彼の心をさも脅かさうとするやうに浮び出てゐたのであつた。

『ええ、忌々しい』。と再び判事は庭先の土に烈しく唾液を吐き出した。

『ソシアリズムだのアナキズムだのつて、碌なものは東京にはありやしない。何が近代なの

だ。人の心靈を滅茶苦茶にしてゐるぢやないか、何も知らぬ小伜達が、やれ文學だ思想だのと騒ぎ廻る。俺達の青年時代にはそんな輕薄なものはなかつたのだ。何が近代なんだ。馬鹿なつ、俺の息子も文學をやると云つて、俺の強て止めるのも聞かず東京へ出て行つた。俺が、親の俺が頭を下げて恥かしい思ひをして迄も止めるのを聞き入れず、遂々東京へ出て行つた。その時の俺の失望が何れ程大きかつたか、淋しさが如何に深かつたか、一度だつて彼奴はそれを考えて見たことはなからう。それに此の頃の態は何うだ、何もしないですぐすぐ家へ歸つて來て……何が藝術なのだ、何が近代の思想なのだ、俺の時代にはもつと人間が眞劍だつた。眞に心から天下國家の事を心配したものだ。ああ俺はもう彼奴のお蔭で氣狂ひになりさうだ』。

かう喋つた老判事は眞赤になつて兩掌を擦り合せながら、自分の子息と子息の心靈とを破滅させたと思ふ都會生活を、烈しく自分の妻の前で呪ひ罵るのであつた。

二

その時刻、判事の息子はいつもの室で、机の前に寢ころんで陰鬱な眼で凝つと天井を瞶めながら、取止めもない空想に耽つてゐた。彼は兩手を頭の下に差入れて、靜かに音もなく暮れて行く初夏の夕暮の響に耳を澄せてゐた。彼の耳には何處か遠くで吹く、麥笛の單調な響が絶えず窓から流れ入つて來た。

一日一日と姿を更へて行く自然の慌しさが、彼の心を一層暗く沈默に誘つて行くのであつた。彼は大學の學生々活を思ひかへした。それから一瞬時も靜止のない、刺戟の多い都會生活を思ひかへした。然しそれらは皆今の彼にとつては、極くつまらない無駄物のやうに思はれるのであつた。それら都會生活の總てと、彼の現在の心境とは餘りにかけ離れ過ぎてゐた。とは云へ田舍の家の生活も、彼には都會生活同樣に辛いものであつた。頭髪に白髪の交つた兩親が彼の身の上に就て、何んなことを考へてゐるかを察すると、彼はその悲哀ばかりでも、胸が壓潰さ

れるやうなのを感ずるのであつた。彼は天井の雨漏りが汚點となつて、奇怪な姿を描いてゐるのを凝つと物珍らしさうに瞶めながら、古いこの家に滿ちた黴の匂を嗅ぎながら、自分の少年時代の懷しい記憶の裡に彼自身を浸してゐた。然し暫らくするとそれにも堪えられなくなつて彼の心は不意に戸外を歩き廻りたい慾望に驅られて來た。

戸外にはもう地上一帶に薄闇が降り灑いでゐた。刈りとつた――けれどもまだ畑に積み重ねたままの、麥束からは露に濕つた甘い匂が香しく四邊りに流れてゐた。彼はその畑の中を歩きながら、烈しい孤獨を感じだした。彼は立止まつて四邊りを眺め廻した。廣濶な麥畑一帶はすつかり暮れて終つて、深い綠のなかに埋もれた家々からは、ちらちらと燈火が射してはゐたが、空にはまだ仄明りが殘つて大きな鳥が音もたてず飛んでゐた。窮窿は何事かを瞑想するやうに耳傾け、山や野はその空を憂ひ顏に默々と鎭まり、露に煙つた草や樹はひそひそと秘密を囁き交はしてゐる。太陽の沈み果てた後の空には、細い銀色の月が冷たく懸つてゐる。微風は五月の夜の闇のなかを、威勢よく吹きこぼした。そしてその風の吹く果に、ステエションの灯の光りが地から湧き出たやうに燦めいてゐる。彼は其方角へと足を向けた。

暫らく歩いて行くと、彼は彼方の地平線がゆらゆらと搖めくやうなのを覺えた。そして少しばかり嘔吐氣を催した。『暫らく戸外へ出なかつたからだらう』と彼は思つた。そして眼をいつぱいに睜つて闇のなかを瞶めた。闇の中にはその闇よりもまだ濃い、大きな不可思議な影が見えた。何とも判斷のつきかねる漠然とした、その影を彼は默つて瞶めてゐた。するうちに少しづつ彼には恐怖が萠して來た。それはある不可思議な超自然的な物象が、彼の心にのしかかつて來るやうな恐怖であつた。その灰色な影のなかから何物か自分の運命を支配してゐるものが、凝つと彼を瞶めてゐるやうな氣がした。そして一度そのものに摑つたが最後、何んなに跼いても最早それから拔けきれないやうな氣がした。

『病的だ。こんなことを自分の理智は承認しやしない。唯、自分が病的になつてゐるから、こんな事を感ずるんだ』。と彼は呟いて、その病的な感覺を振り落さうとでもするかのやうに烈しく身體を動かせた。

『自分を苦しめるものは、この自分自身のなかにあるデカダンスだ。自分はその爲めに窒息りさうな程に苦しんでゐる……大學の講義だつて……否、學問には限らない總べて都會の生活だ。政治にしろ、宗教にしろ、藝術哲學にしろ、皆がディレッタンティズムに溺らされてゐるんだ。然し病氣が自分の身體中にあることを意識して絶えずそれと戰つてゐる人間にとつては、そんなものは人生の必要品ではないんだ。飾窓の飾物のやうな宗教や哲學や藝術やまたは政治は、富豪達の食後の腹ごなしに、晝寢の床の上にでも遣つて終ふがいいんだ』。彼は足下の土の一塊を桑畑の奥へ蹴込みながら、冷たい微笑を浮べて云つた『見ろお前達が飾窓の飾物をいい氣になつて賣物にしてゐる時に、此村の農夫達は烈しい勞働で飢え疲れてゐるんだぞ。この恨みと呪ひとが永劫に闇から闇へと消えて行くものと思つてゐるのか。この農夫達の子の時代にか孫の時代にか、いつ赤旗を立て立ち上る者がないと、お前は斷言することが出來るのか……』。

彼は忌々しさうに一枚の桑の葉を引きむしつて鼻にあてた。水々しい匂は彼の鼻腔から肺へ流れ込んだ。この土壤の中から何の混り氣もなく素直に生え育つた葉の匂には、今迄の都會の生活に求めることの出來ないあるものがあつた。彼はそれを充分によく感じ味ふことが出來た。彼はその感じのために何とも云へぬ寂しさに襲はれ、眼の前に灰の塔が音もなく崩れ落ちて行くのを、默々として眺めてゐるやうな心持がした。今日まで彼自身の考へて來たことは、悉皆夢であつたのかと思ふと、彼はこのまま大聲をあげて、目的もない永久の闇のなかへ驀然に走り去つて行きたかつた。

『ほんとうに何うしたら、いいのだらう』。かう思つて彼は齒をぎりぎりと嚙み締めた。

闇は四邊りを暗く押包んでゐた。刈り取られた麥圃、桑畑の裸地が、仄のりと荒地のやうに暗の底から浮き出してゐる。その畑地の北の端を一條の鐵道線路が、眞直ぐに西から東へと走つてゐる。彼はその線路の踏切の所に躊躇んで、凝つとその線路の果を眺めてゐた。梅雨期の曇つた空は低く圓く線路の上に垂れ下つて、宵の明星が一つきらきらと光つてゐた。其處から眺める村は暗の底に沈んで、そのなかから時々はね釣瓶の軋る音が聞えて來た。彼は凝つとそれに耳傾けた。何處となくざわざわした響に滿ちた夜で、山裾の竹藪のなかの寺の池からは、甘